

# ごらし民俗誌

岩手県大船渡市末崎町碁石五地区





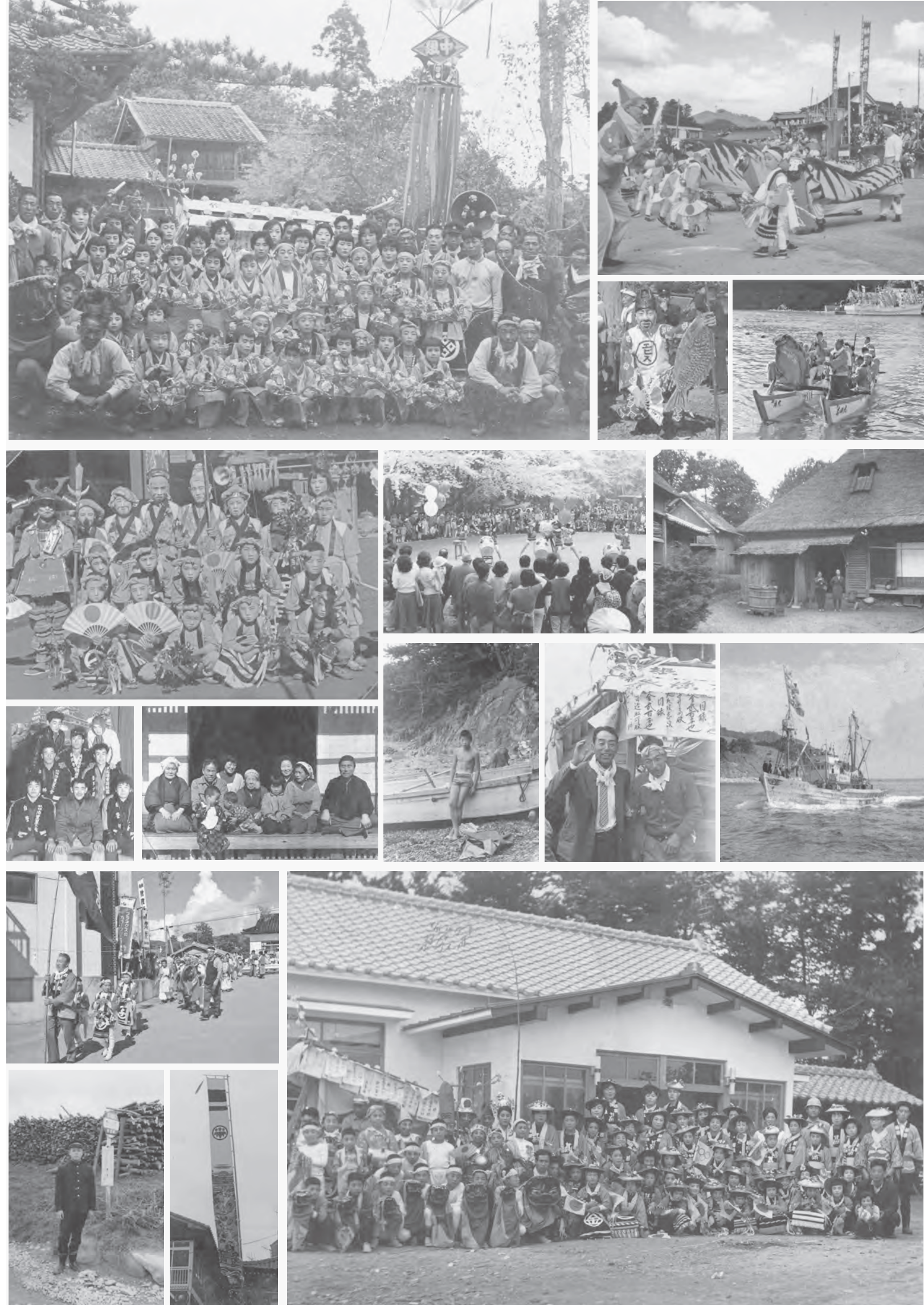
# 目次

泊里五部落	02
1. 村の記憶 泊里・西館	04
2. 土地の記憶	08
海に生きる	12
附：海の一年	23
住まう 気仙大工のいる暮らし	24
1. 吉田力男家の住まいと暮らし	24
2. 気仙大工と碁石地区の家屋	30
いのり 祭り行事と信仰	33
1. 碁石の祭りと芸能	33
2. 泊里の祭礼記録文書から	36
3. 碁石の神さまたち	40
附：一年の行事あれこれ	44
4. 古写真を読む	46
移りかわる風景	50
1. 丘の風景	52
2. 海の風景	54

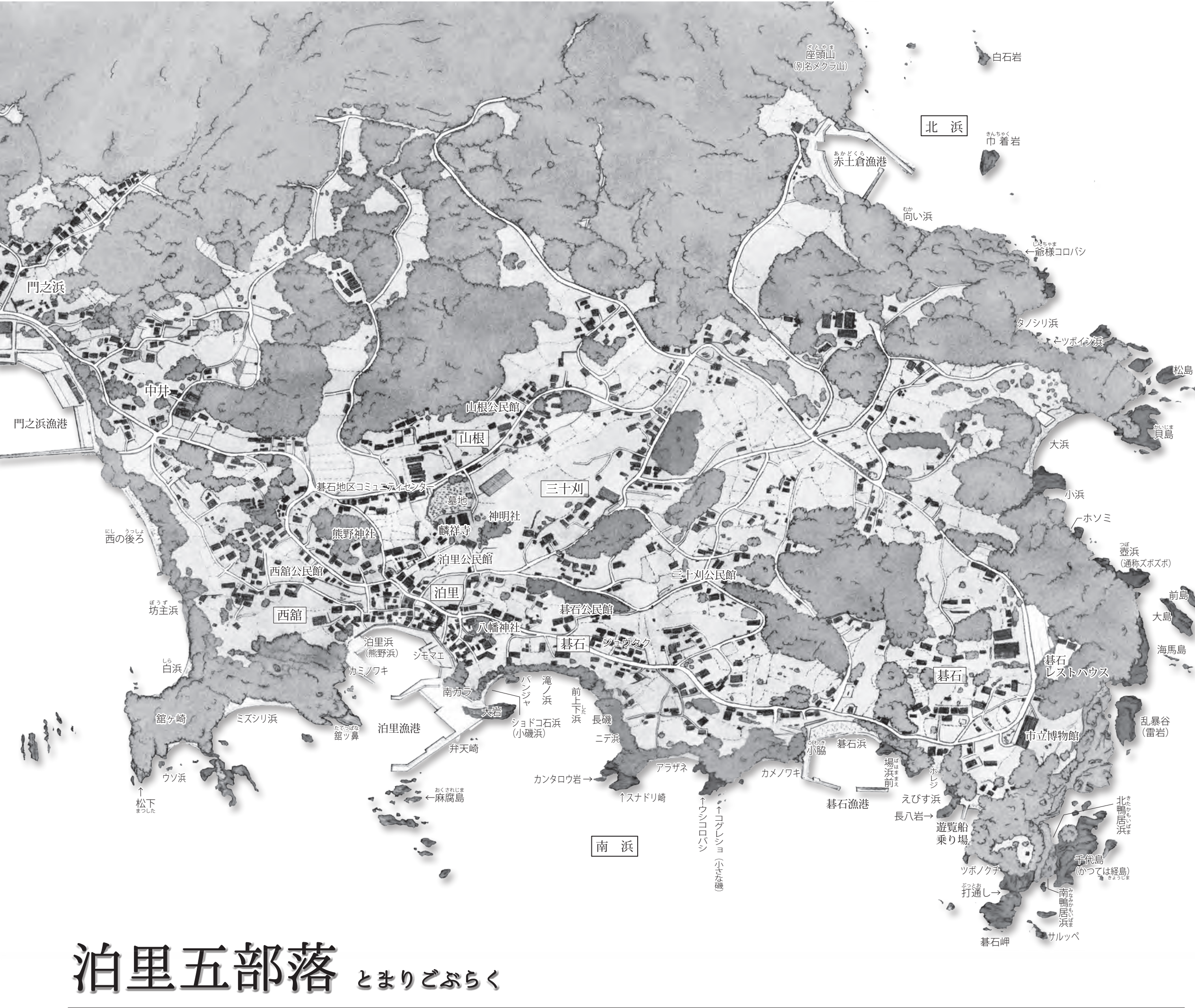


朝靄の門之浜湾 延縄式のワカメ養殖台が並ぶ

# ざらし民俗誌



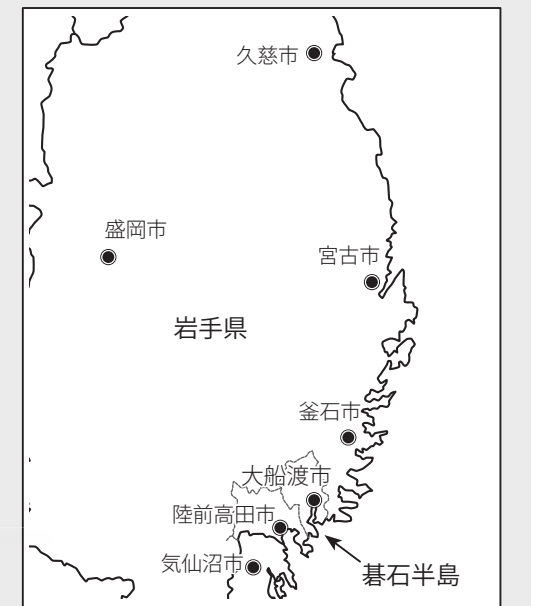




# 泊里五部落 とまりごぶらく

**大** 船渡市末崎町。リアス式海岸が続く岩手県最南部のこの一帯は、陸前高田市や宮城気仙沼市と共に気仙地方と呼ばれています。ここに、海に向かって4.5キロほど突き出た碁石と呼ばれる半島があります。半島の突端、変化に富んだ雄大な海岸線は景勝地としてよく知られており、碁石のような漆黒の丸い石が敷き詰められた碁石浜は、この半島の名前の由来にもなっています。半島の南は南浜、北は北浜と呼ばれ、豊かな漁場として天然アワビやウニを獲る小漁や、ワカメやコンブ、カキなどの養

殖が盛んに行われてきました。昭和27年、当時の末崎村が大船渡市と合併したことで、碁石は大船渡市との繋がりが深くなりましたが、経済圏としては長らく陸前高田に属しており、盆正月の市(盆マチや詰め市)には、必ず高田へ買い物に出かけたと言います。この半島の突端にかけて西館、泊里、碁石、三十刈、山根と呼ばれる5つの地域が広がっています。現在「碁石5地区」と呼ばれるこの一帯は、集落の行事を共に行ったり、婚姻関係を結んだり、これまでも緊密な関係を結んできた地域です。



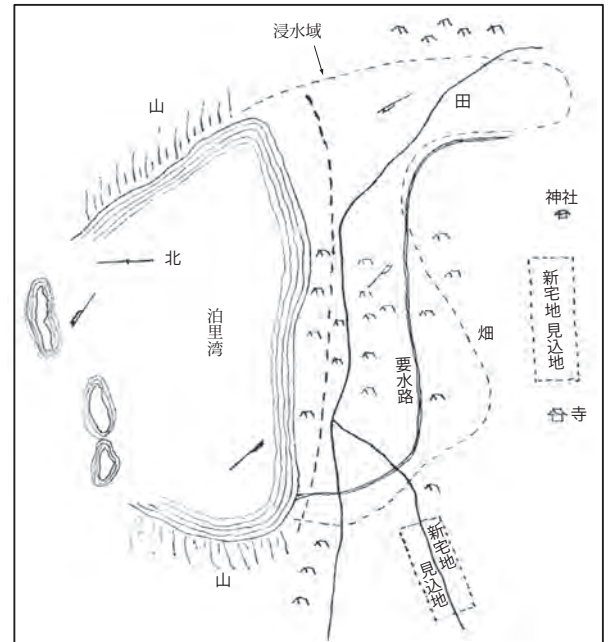


1

村の記憶—泊里・西館

「碁石5地区」がかつては「泊里5部落」と呼ばれていたように、この地域の中心だったのは泊里集落だ。泊里は「中組」とも呼ばれ、泊里5部落の中でも最初にひらけた集落と言われている。それがいつの時代のことなのかは定かではないが、碁石の吉田力男さん（昭和18年生まれ）によれば、慶應3年生まれのひいおばあさんの話として、かつては「泊里三十八軒」という時代がしばらくあり、さらにその前は「泊里八軒」であったと言い伝えられているという。48〜49ページの絵図は江戸時代後期のものと考えられるこの地域の古地図だが、湾に面して30余軒の家が立ち並ぶ様子が描かれているから、この頃が「泊里三十八軒」の時代だったとも考えられる。この絵図にもあるように、泊里の中心に鎮座するのは、数百年の歴史を持つという熊野神社だ。また、その東には臨濟宗麟祥寺や、大和田家（屋号・元寺）の氏神である神明社があり、また泊里湾の東には武田家（屋号・西館の大屋）の氏神である八幡神社があることから、泊里は信仰の面から見てもこの一帯の中心地であったと言える。

平成23年の東日本大震災の前、泊里には36戸・120人余りが暮らし、小漁や養殖漁を中心とした漁業などで暮らしをたててきた。そうして多くの恵みを海から受けてきた一方で、泊里の歴史は常に津波と共にあった。海に面し、土地の低い泊里は、人々の記憶として語られるだけでも明治29年、昭和8年・35



陸前国気仙郡末崎村字泊里

○ 流亡戸数	五十六戸	○ 負傷人口	
○ 潰戸数	四戸	○ 海面ヨリ高低	六尺
○ 流亡納屋		○ 満干潮ノ差	
○ 潰納屋		○ 打上浪	六十尺
○ 死亡人口		○ 浪走り	自百間 至三百間

○ 泊里は元宅地は棟を並べ町の如し。今回、海嘯に皆流亡せられとも、再び居住の見込、これ無により、朱点の二ヶ所に新宅地を設け、移転の設計中

○ 元宅地跡 海岸には防風潮林の植付の急務なり

○ 安政三年(1856) 七月二十三日の津浪は、家宅に浪打上がらず

明治29年『岩手縣沿岸大海嘯部落見取絵図(甲)』  
※ 図と文を書き起こしたもの。明朝体は筆者の加筆

年(チリ地震津波)、平成23年と、津波ごとに大きな被害を受けてきたのである。そしてそのたびに高台への移転が計画されるものの、時間の経過と共に再び人家が増え、また波をかぶるとい歴史が繰り返されてきた。多くの人が漁業を営んでいたことから、海の近くに住みたいという気持ちが人々を浜の近くに引き寄せたのだろう。

明治29年の津波の前、泊里の人口は61戸・474人、「宅地が軒を並べて町のようなであった」と記録されているから、当時はとても大きな集落だったようだ。しかし、この時の津波で泊里では住民の約半数の尊い人命が犠牲となり、また、津波直後の泊里浜には「再び居住できる見込み」がなかったことから、浜から高台にのぼった2ヶ所に「新宅地」を設ける移転計画が立てられた、という(右図参照)。こうして、泊里から碁石や三十刈、山根などの高台へ、少しずつ

その居住地が広がっていったようだ。ただし、結局移転をしなかったり、しばらくして他所から転入したケースも多くあったようで、明治の津波から30年後、昭和2年の記録を見ると、泊里はやはり「大部落」であると記されている。

その後、昭和8年の津波によって再び大きな被害を受けた泊里では、再度高台への移転計画が進み、碁石には集団移転地(通称「住宅」)なども造られることとなる。昭和15年の記録に、泊里では「人家次第に山手の方に移り、漁業家の作業場と化した」とあると記されている通り、こうして碁石半島のさらに先の方まで居住地が広がっていった。ただし戦後すぐ、昭和23年の航空写真(51頁参照)を見ると、碁石や三十刈、山根などの高台にはまだ民家はまばらで、代わりに一面の畑が広がっているから、泊里がごく近年まで、人家の密集する「泊里5部落」の

中心的集落だったことがわかるのである。

東日本大震災で、泊里は36戸のうち35戸が被災した。泊里の草分けの家と伝えられる大和田太一さん(屋号・元寺、大正8年生まれ)によれば、「明治や昭和の津波で残った家も今度の津波ではサッパと影も形も無く流された」と言う。それを受け、震災からちょうど2年後の平成25年3月、泊里は自治会として解散し、地区の共有財産も分配。それぞれの家が別の地域に転入することとなり、泊里はその長い歴史の幕を閉じたのである。

\* \* \*

泊里と並んで古くから集落が作られていたのが西館だ。地区の南西にのびる館ヶ崎と呼ばれる小さな半島には、かつて「西館城」があったとされ、現

在でも石積みらしき遺構が残されている。地元では、平安時代から鎌倉時代にかけて活躍した葛西清重の重臣、武田太郎信義の居城であったとも伝えられており、大正生まれの古老に聞くと、この付近から兜を被った人骨が何体か発見されたことがあったとか、かつては本丸・一の堀・二の堀などの地名がつけられていたことなども記憶されている。

その武田家の子孫とされるのが「西館の大屋」の屋号を持つ武田家(現当主・貞二氏)だ。この西館の大屋は末崎町全体でも6、7軒目に古い家だと伝えられ、ここから分家した金山、メヤ(武田家の「前」の意味)などと共に西館では草分けの家と言われている。48〜49ページの絵図で泊里の西側に描かれている数軒の家も、これらの家と考えられるという。

昭和の時代、西館は半農半漁で暮らしをたててきた。浜では男たちが小漁を、丘では女たちが麦作を始めとする耕作に精を出し、西館城があったという館ヶ崎も一面の畑として拓かれていた。しかし昭和30年代以降にワカメやホタテの養殖が始まり、浜仕事に手がかかるようになってからは女が浜に出ることも多くなった。近年では勤め人も増え、碁石5地区の中でも勤め人の多い集落として知られていた。

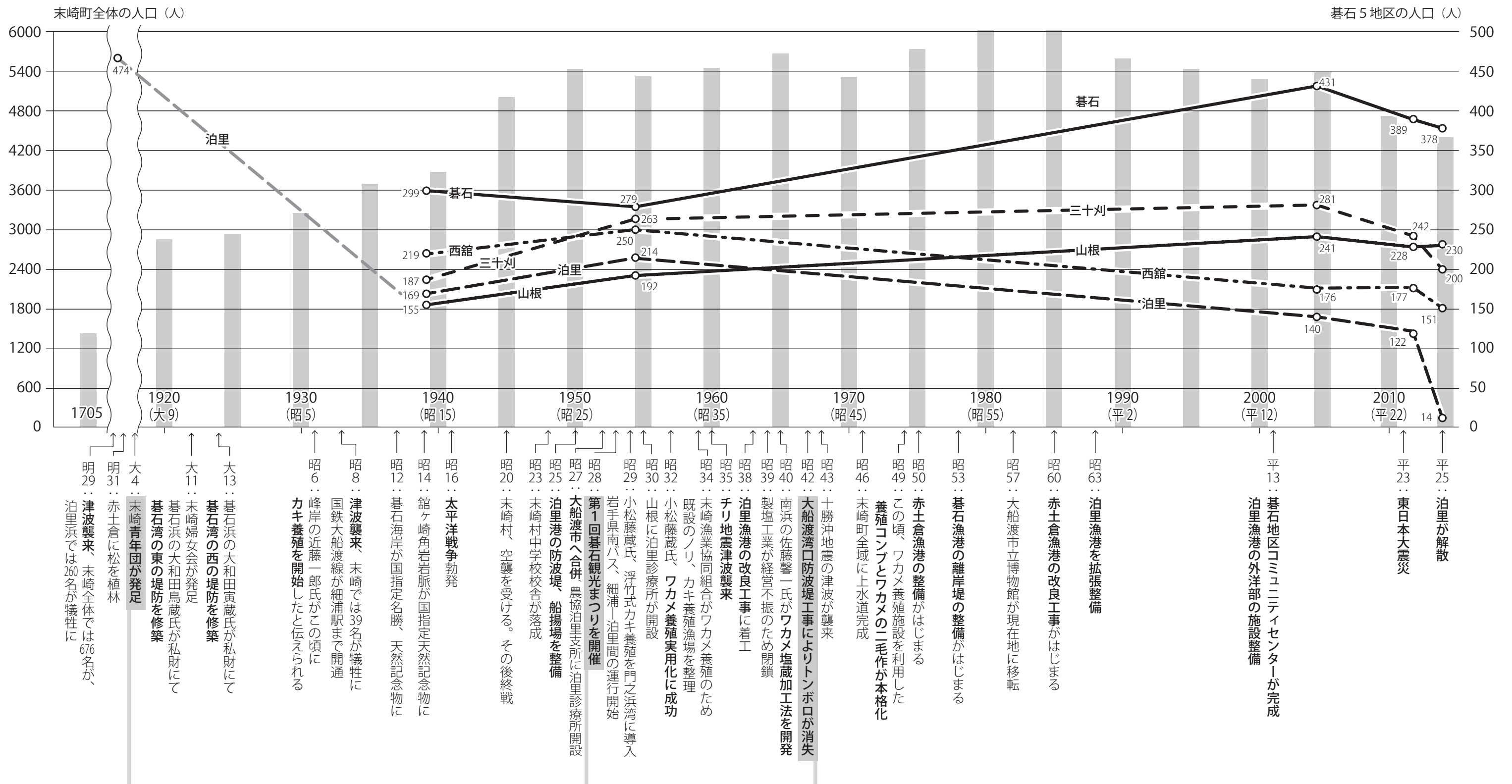
東日本大震災により、西館では43戸のうち38戸が津波による大きな被害を受けた。高台移転計画や地域外への転居が進み、この地で長い時間をかけて重ねられてきた暮らしのあり方も、大きな転換期を迎えている。



1. 震災前の泊里の家並み(『津波をみた男』大船渡市立博物館H9年より転載)  
2. 熊野神社式年大祭に参加する泊里の人々。幟には「中組」と

書かれている(昭和37年か、熊谷芳弘氏提供)  
3. 平成元年(1989)の熊野神社式年大祭、西館の家並み(武田貞一氏提供)  
4. 昭和55年(1980)の熊野神社式年大祭、西館の家並み( // 提供)





明29…津波襲来、末崎全体では676名が、泊里浜では260名が犠牲に  
 明31…赤土倉に松を植林  
 大4…末崎青年団が発足  
 大11…末崎婦女会が発足  
 大13…碁石浜の大和田寅蔵氏が私財にて碁石湾の西の堤防を修築  
 昭6…峰岸の近藤一郎氏がこの頃にカキ養殖を開始したと伝えられる  
 昭8…津波襲来、末崎では39名が犠牲に国鉄大船渡線が細浦駅まで開通  
 昭12…碁石海岸が国指定名勝、天然記念物に  
 昭14…館ヶ崎角岩脈が国指定天然記念物に  
 昭16…太平洋戦争勃発  
 昭20…末崎村、空襲を受ける。その後終戦  
 昭23…末崎村中学校校舎が落成  
 昭25…泊里港の防波堤、船揚場を整備  
 昭27…大船渡市へ合併、農協泊里支所に泊里診療所開設  
 昭28…第1回碁石観光まつりを開催  
 昭29…小松藤蔵氏、浮竹式カキ養殖を門之浜湾に導入、岩手県南ハス、細浦、泊里間の運行開始  
 昭30…山根に泊里診療所が開設  
 昭32…小松藤蔵氏、ワカメ養殖実用化に成功  
 昭34…末崎漁業協同組合がワカメ養殖のため既設のノリ、カキ養殖漁場を整理  
 昭35…チリ地震津波襲来  
 昭38…泊里漁港の改良工事に着工  
 昭39…製塩工業が経営不振のため閉鎖  
 昭40…南浜の佐藤馨一氏がワカメ塩蔵加工法を開発  
 昭42…大船渡湾口防波堤工事によりトンボロが消失  
 昭43…十勝沖地震の津波が襲来  
 昭46…末崎町全域に上水道完成  
 昭49…この頃、ワカメ養殖施設を利用した養殖コンブとワカメの二毛作が本格化  
 昭50…赤土倉漁港の整備がはじまる  
 昭53…碁石漁港の離岸堤の整備がはじまる  
 昭57…大船渡市立博物館が現在地に移転  
 昭60…赤土倉漁港の改良工事がはじまる  
 昭63…泊里漁港を拡張整備  
 平13…碁石地区コミュニティセンターが完成、泊里漁港の外洋部の施設整備  
 平23…東日本大震災  
 平25…泊里が解散

### 人口のこと

各集落の人口の動態についてはあまり多くの資料が残されていません。ただし全体的な傾向として、終戦後に人口が回復したのち、泊里や西館が人口減少しているのに対し、碁石、三十刈、山根は人口が増加していることがわかります。特に碁石は昭和29年(1954)からの50年で1.5倍に人口が増え、現在では面積・戸数人口とも5地区の中で最大となっています。比較的土地の低い泊里・西館から碁石方面への高台移転が進んだ結果と考えられます。



泊里青年団の活動 (昭和30年初頭・吉田力男氏提供)



碁石観光祭の喉自慢大会 (昭和30年代・武田貞一氏提供)



トンボロ (陸繋砂州) にて浜遊び (昭和31年8月・武田貞一氏提供)



基石では現在でも屋号を用いている。屋号には場所柄を示すもの、家の由来を示すもの、商売を表すものなど様々。土地や暮らしの記憶がそのまま凝縮されている。ここでは津波で被害を受けた家々を中心に、家の場所や屋号・井戸の場所などを示した。



① 明治津波の到達点に立つ海嘯碑  
② 麟祥寺前の海嘯碑  
③ シメンタの井戸

(M29 海嘯碑) ※明治津波の到達点に立っていたが現存せず

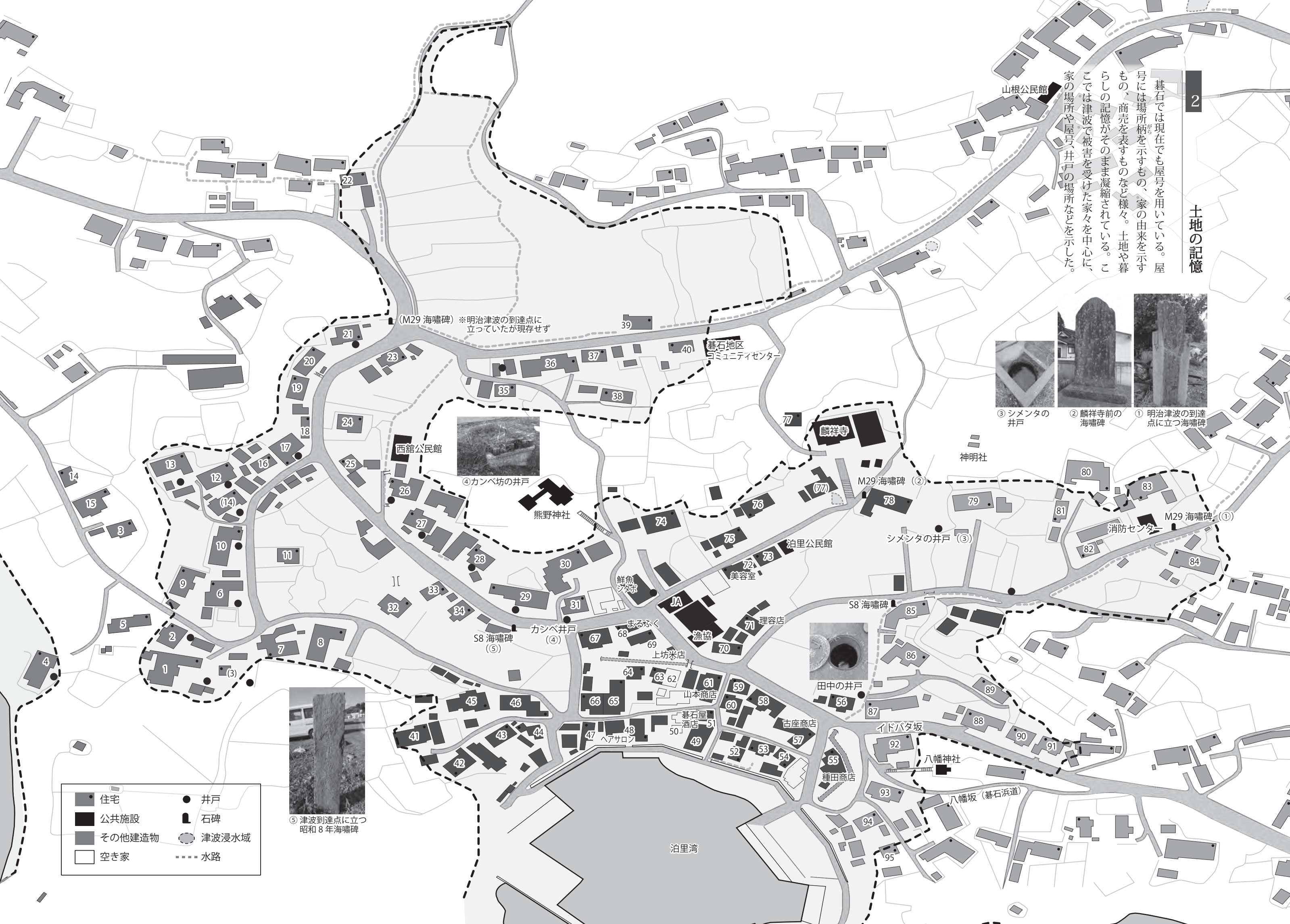


④ カンベ坊の井戸



⑤ 津波到達点に立つ昭和8年海嘯碑

- 住宅
- 公共施設
- その他建造物
- 空き家
- 井戸
- 石碑
- 津波浸水域
- 水路









# 海に生きる



**今** を去ることおよそ70年前、昭和10年代の碁石5地区のなりわいについて『気仙郡末崎村郷土教育資料（一）地理・産業・歴史 第一編 地理』（昭和15年、吉田藤一・佐藤洋）に、次のような記述があります。

**西館** 泊里湾の西部を占め中井より峠を越えたところがあり、其の先に旧西館城跡あり。半農半漁の部落なり。

**泊里** 泊里湾の沿岸に二十五戸の人家あり。古は人家密なる部落として知られたりしが再度の津波に被害をこうむり、人家次第に山手の方に移り、漁業家の作業場と化しつつあり。

**三十刈** …部落は農を主とし漁は従となる生活状態なりし（中略）昭和八年の津波以後、人家次第に多くなる。

**山根** …この部落は山根盆地の為せる田地を抱へ村内の田地の三割を占むれど、其の所有は

他部落人の物多し。海岸も遠く農事も振はず…（後略）。

**碁石** 本村最南東端部落にして（中略）隣部落泊里と共に聚落状況は同じうし小漁浜として発達せるものなり。又一部は（中略）畑地によりて農業経営を主とするものあり…（後略）。

農業や漁業の詳細な実態はこの記述からはうかがえませんが、どの集落も半農半漁をなりわいとし、しかし海のすぐそばに立地する泊里集落や碁石集落が漁業への暮らしの依存度が高かったことは伝わってきます。碁石だけでなく昭和前期の三陸沿岸の集落は、農業では麦や稗などの穀物や蔬菜類を栽培し、海では早春の岩ノリに始まって、春にはマツモ、フノリ、ワカメなど天然の海藻をとり、夏にはテングサやウニ、晩夏から冬にかけては天然のコンブやアワビなどの合間に沿岸でのイカやタコ釣り、刺網や延縄を用いてのドンコやメヌケ、イナダ、サケやマスなどの回遊魚の採捕と、季節に応じた漁撈を行なって暮らしをたてていました。また、こうした農業や漁業の合間をぬって一家の男たちは東北や北海道各地の大謀網漁業の網子や北洋漁業の船子としての出稼ぎも行なって暮らしが維持されていたようです。

こうした碁石や三陸の沿岸集落の営みは戦後大きく変化していきます。漁船の動力化、大型化で生産力が高まり、冷凍冷蔵設備の普及や、鉄道、道路などの輸送網が整備され、大消費地である関東圏への海産物輸送が容易になると、三陸の海産物も大量に

売れるようになり、天然物の魚介の採捕と細々としたりノリやカキなどの養殖を組み合わせた漁業専門でも暮らしがたてられるようになったのです。中でも大きく碁石の暮らしを変えたのは碁石に隣接する中央地区の門之浜出身の小松藤蔵によるワカメの人工栽培方法の開発や、養殖したワカメをポイルし塩蔵する技術の開発などでした。天然ワカメの時代には天日乾燥するだけで、ひとときは碁石のワカメを四国の鳴門の灰ワカメとして加工する下請け生産時代もありましたが、ワカメ養殖と保存のきく湯通し塩蔵ワカメの開発により、三陸ワカメは一挙に市場を獲得し、碁石へも豊かな海の時代がもたらされたのです。

戦後も昭和の50年代になると碁石の海にはワカメやコンブ、カキやホタテなどを吊るした色とりどりの浮きが花咲いていました。碁石岬では焼いたホタテや塩ウニ、ワカメやコンブが売られていました。これらは折からの旅のブームで碁石海岸を訪れてくる旅人をも魅了する豊かな海の景観であり、海の味覚でした。しかしこうした平和で豊かだった碁石の暮らしは、平成23年の津波でその多くが海の中に消えてしまいました。

大津波から3年を経た今日、少しずつですが碁石の海にふたたび養殖ワカメやカキを吊るす浮玉が浮かび、浜は津波前の活気を取り戻しつつあります。この章では、わたし達がお会いできた方々だけに限られていますが、大津波前後の碁石の海を体験してきた方々の海にまつわる思い出をご紹介します。

## ●津波で養殖施設を流しましたが…●

今度の津波震災で施設も流してしまいましたが、震災後にワカメ養殖をやりたい人で再申込をしたんです。碁石組では今年（平成23年）ワカメ養殖をやったのは17名。前は50人がワカメやってた時があります。でも今の方がワカメ養殖の施設台数は多いんです。昔は機械力がなかったから養殖は労力的に大変だったのね。今は1人で昔の3倍くらいやってる。ワカメの苗を巻くロープの長さは今は160疋、ホタテやホヤは100疋です。以前は碁石、泊里、三十刈と部落単位で養殖をやったけど、今は人が少ないから、こっち（南浜）は全部一緒にになった。養殖用のロープを張るための碇の敷設などの作業の効率は、全部一緒にやっても効率的でないから、1班、2班とか分かれて作業する。われわれは碁石だけで1班だけど、今は泊里、中井、西館で1グループ。山根と三十刈で1グループ。（碁石・吉田力男さん・昭和18年生まれ）

## ●泊里のワカメ養殖は、今は俺一人…●

泊里は昔は半農半漁だったけど、震災前は漁業をやっている家は大してなかったね。津波震災後のワカメ養殖は、泊里組では俺一人になったの。昔は泊里で16名か17名があった。泊里の海岸に作業場があつて。震災直前にワカメやってたのは泊里組では俺と三十刈の熊谷節男さん、大和田友男さん、鎌田吉夫さん、大和田忠さんの5名だ。その人と西館3名、尾崎誠さん、武田隆さん、泉田幸七さん。泊里5名と西館3名の8名でワカメ組をやっていた。津波前は中井は中井の人だけでやっていたの。熊谷太一さん、鎌田芳勝さん、鎌田末雄さんの3名がやっていたんだね。俺はワカメは二次加工までしないわけだ。ポイルすると作業場いるし。震災直前に55カゴほど出すまでになっていたのさ、15刈つて。震災でみんな流されちゃったんだ。（泊里、現在は太田団地（小河原）へ移転・熊谷克夫さん・昭和17年生まれ）

## ●この爺さん、何やってんだべ●

小松藤蔵さんが昭和32年に養殖方法を開発してから、碁石ではワカメ養殖をやっているんですね。もともと大昔から、メカブが胞子を出しているのはわかっていた。しかしそれを人工的にやる方法はわかんなかったの。わたしが小学校の頃は、この爺さん何やってんだべ、と思っていたけど、藤蔵さんは人工的にメカブから胞子が出るのがいつか、そんな研究をやっていたんだね。胞子が何に一番つくのか、そしたらシュロ（棕櫚繩）だということがわかつた



て。そうなる、「何、そんな事なら俺もわかつた」という人は一杯いた。しかし学説として発表したのは小松さんなんです。宮城県でそんなことはわかつていたというのは一杯いたそうですけど。

ワカメは最初は乾燥ワカメだったんです。乾燥場を作つて、それからポイラーたいて、ポイルやるようになって。藤蔵さんは漁協の人で、販路を拡大して。あの人をのぞいてワカメ養殖は語られないね。小松さんは特許とつて（技術を）自分のものにできたんだけど、小松さんという人は、言葉は悪いけど裕福な人ではなかったんだけど、みんなのためにということでも末崎や他の土地に広めたんだね。人望はあつたね。（碁石・吉田力男さん）

## ●ワカメ養殖は小松藤蔵さん、あの人の後を継いだの…●

ワカメ養殖の開発者は小松藤蔵さん、あの人の後を継いだんです。ただあの人は自分は養殖は手掛けなかつたの。あの方はひとつの天才で。自分で頭で



1. 昭和30年代か。ワカメの胞子を付着させるシュロ縄の準備（吉田力男氏提供） 2. シュロ縄にびっしり育ったワカメの芽。これを小さく切り取って幹縄に巻き込み、海中に投じてワカメを養成する（H24年12月）





考えるけど、実行はしない。藤蔵さんは漁師なんだけど、何て言うか、漁師であって漁師じゃないの。頭いいの。藤蔵さんはワカメの養殖という遺産を残してくれた。それを実行に移して、現在の養殖ワカメに仕立て上げたのが我々。藤蔵さんは、教えてくれたんではなく、「そうだろう」と言うの。「メカブから胞子が出るだろう」と。あの人の頭の良さって知らない。当時、若いうちは、うちの親父が大網の大謀だの、脇大謀、副大謀っていうようなのしてたから、その配下として藤蔵さんを使って、宮城県の出島、網地島、金華山、あのあたりを十島って呼んでるけども、定置網を入れて、そこさ出稼ぎに行つて、俺の親父が責任者で藤蔵さんを使つたんだって。親父は、藤蔵さんは賢いやつだったって。だけども、功労はできるけども、実際にはやんないで…。

—(奥さん) やつたんだよ。藤蔵さんはカキ剥きとか、ノリ養殖とか。いろいろやつてたよね。  
やつたかなあ。あの人はいろんなことを考える人だったからね。発想がいいんだね。藤蔵さんがワカメの養殖方法とか、そういうことを考えているということは、さつき言ったみたいに、親父の配下として、功労はできるけども、実際にはやんないで…。

—(奥さん) 天然のメカブって大きくて気持ち悪いもんだ。  
陰干したのを水に入れる温度つうのがあるわけです。あまりあつたかくてもダメだけども、限度があるけれども、ある程度の温度までですとね、もうメカブをさつと海水に入ると、メカブから煙のように、ふわーっと胞子が出てきますよ。そういうふうに出たらメカブをあけてしまつて、そして種糸を入れれば、一番効率がいいはずなんだ。ところが、その理屈がわかんないから、今の人は、メカブと種糸の綱と一緒にに入れてるんですよ。一緒に入ると、入れた瞬間、種糸の綱が海水を吸つてしまふね、そうすると、綱は種を薄くしか吸わない。綱が海水を吸つた後で胞子を吸わされるような状態だね。そうでなく、胞子を放出させておいて、その後に種糸の綱を入れれば、自然に綱さ、海水と同時に種が吸い込まれるわけだ。今の人はそうでない、先に種糸を入れて、それでメカブ入れるんだ。綱を先に入れてしまつたら、綱が先に水吸つてるから、効率が悪い。

種糸作るの組合(漁協)でなく個人ですね。碁石がワカメ発祥の地つうんだけども、逆に今は種を買ってきてんです、よそから。ほとんどの生産者が、種をついたのを北の方から買ってきて。大槌とかから。ここが発祥地だから、逆に種糸を売つてやるくらいいいはずなんだけれども、そうじゃなく、その真似た人たちがやつたのをわざわざお金出して

てあの人はやつてたんだが、あの人が賢いから、自分を使った人に、今度はいろんなことを教えるような立場に、立場が逆転して…。藤蔵さんは俺のお袋と同じくらいの年だから、年の差あるから直接の付き合いはないな。(山根・鈴木祥正、ツネ子さん夫妻・昭和12年、昭和15年生まれ)

●ワカメ研究部で

宮城県の方まで教えに行ったの

ワカメ養殖の研究部を始めたのは、とにかく結婚してから。結婚が昭和37、8年くらい、それから2年くらい経つた時なんです。だから、ワカメの技術も、養殖の技術もそれまではないんですよ。

—(奥さん) 泊里という部落が、今はなくなつたけど、そこにも何人かこの人たちの仲間がいたんですよ。

最初は天然のワカメのメカブをとつてきて、陰干しするんです。天日に干すと、胞子が死んじゃうから。メカブのノロはね、ぬるぬるしてるの。胞子を保護するためのノロらしいから。それを日陰に陰干しすると、我々は「カブレ」って言ってるんだけど

—(奥さん) わたしたちは2年くらい前まで種つけていたね。  
自分たちでやれば、いい金ができたものを。逆に宮城県の女川の手前あたりまで、わざわざワカメの養殖方法を教えさいつたの。我々グループで。(山根・鈴木祥正、ツネ子さん夫妻)

●なかなかうまくいかない種作り

種つけは6月過ぎからやつてる人もいるけど、7月だね。6月の末になると天然のメカブ採つてきて一晩陰干しにして、そしてタンクに水汲んでメカブを入れて、種をつけるシュロと一緒にいれて、そして1時間か2時間、メカブが吐き出した胞子を種糸のシュロにつけるんです。早い人は40分でシュロ糸をあげます。これをわれわれは「種つけ」と言っています。その種つけたシュロを海さ持つていってロープに吊るしておくんです。それをね、9月に

いっぺん掃除して、またそのまま吊るしておく、10月になると芽が出る…。メカブから種は作つていけど、うまくいかなくて。なかなかに芽が出ない。それで10月末か11月に種買つてくる。種が高いんだよね。1反で1万5千円。オラでなんぼだべな、12〜13反使つたんだね。15万円くらいかかるね。種は釜石あたり、吉浜(大船渡市三陸町)もあるし、俺は吉里吉里(大槌町)で買った。最初は釜石の唐丹で買っていたが、俺は少ししかやつてないけど、15万でも種は足らないくらいだよ。20万でも25万でも足んないぐらだよ。ワカメつかない糸もあるし、つく糸

なんか花粉みたいなのが表面に上がるんですよ、ちよつと青いやつね。

—(奥さん) カビが生えてるような粉吹くんだよね、メカブに。それが種でないのかね。

メカブを顕微鏡で見ると無数に穴があつて、その穴の中に胞子が隠れているらしい。それを擁護するためにノロというのがある。そのノロを乾燥させないで、その種を擁護する。直射日光を当てると胞子が死滅するから、陰で干して。そして、その目安としては、その表面にカブレという、粉のようなものが見えてくると、それが種が熟成したつう目安になるんです。種がメカブから出るといふことは知つたけど、陰干したらいいつうことは分かんなかったの。当時はワカメの前にノリ養殖をやっていたから、ノリの残材のロープを用いてワカメの種をつけたもんです。当時は細いロープだったから。今こんな太いロープになつたけど。メカブ採つてくるのは6月かな。とにかく天然ワカメとつた後だから。採つて、あとは枯れる時に、同時にメカブが成長して、胞子を出すからね。ヤマのものは花が咲くんだけど、ウミのものは花が咲いたんじゃブラブラ

もあるし。俺は12台やつた時が最高だね。人手がないからね。(泊里・鎌田吉夫さん・昭和14年生まれ)

●海水温が17度以下だとワカメの質が落ちます

ワカメの種つけは海水温が下がると駄目なんです。種をつけるときは18度〜20度台だけど、芽を出すのは17度から18度、7月の1日から8月の寒のあたりが、17度から20度台になりますよ。育つたワカメの苗を幹繩に巻き込む時は15度台。それで種つけは7月ですが、6月でも種付けはできます。その時は18度の海水をタンクに入れてあつためてやるんですよ。そうすると胞子の出が良いですよ、それをやつたのが小松藤蔵さんなんです。海水温が17度以下になるとワカメの質は下がる。最低でも17度。これより下がるとワカメの色は変わります。4月に17度台の水温になると、ワカメの光沢の色がおかしくなってくる。

1月は幹繩に巻き込んだワカメの苗の間引き位で、養殖仕事は閑です。お正月の5日過ぎからそろそろ間引きが始まるんだが、今年(平成25年)は正月は無理でしょう。それを過ぎるでしょう。苗の間引きはだいたい2月です。30ヶ月の間にどれだけ苗があればいいか、頭の中にあるんですよ。いい苗だけおいて、後は落してしまうんです。例えば30ヶ月の間に10本おおくか、15本おおくはその人のやり方なんです。2月1日から2月いっぱいまでで間引きは終わります。3月の中頃、間引きした縄から刈り込みが始まります。最後の間引きから45日くらい経つた時から刈り込みしていくという形になっているんで

3. 種つけをしたシュロ縄。海中での生育状況を調べる(赤土倉沖、H25年8月) 4. 養殖ワカメを摘んで泊里漁港に帰港した漁船。これから湯通し塩蔵の加工作業が始まる 5. 水揚げしたワカメの湯通し作業。この後に塩をまぶして冷蔵する(4・5とも H25年3月)





6. 末崎中学校では平成14年(2002)からワカメ養殖体験授業を行っている。この日は地元漁師が教師役を務め、苗の幹縄への巻込み作業が行われた。門之浜漁港にて (H24年12月)

7. 昭和30年代初頭、西館にて。養殖したノリに混じった草の除去作業(武田隆氏提供)。碓石5地区ではノリ養殖は昭和35年に廃止され、それまでのノリ漁場をカキやホタテ、ワカメの養殖漁場に切り替えた

す。5月の連休あたりまでにワカメは処理しなければ駄目。連休明けから6月の中頃までは養殖コンブの刈り込みです。(碓石・吉田力男さん)

●ワカメの下にコンブを吊るす二毛作●

俺もコンブ養殖はやった。あれはワカメとの二毛作だから。コンブは何年やったかな。コンブは12月に種買って来るんですよ。漁協でまとめて。5月の連休あけて、刈り始めるんですよ。ワカメは水面に吊るすんですよ。コンブはその1尺下、ワカメの下に吊るすんですよ。種糸を1尺ずつに切つて。でも震災で養殖の資材全部流してしまつたから、止めてしまつたんだよ。(泊里・鎌田吉夫さん)

●ノリ・カキ・ホタテの養殖●

ノリ養殖もありましたし、カキは早くからありましたよ。カキは我々の時代は50・60人、ほとんどの人がやってたよ。やってないのは西館の大屋(屋号くらい)。ここはちよつと時化ると、カキ棚もノリの施設もやられてしまふんだね。ホタテ養殖は末崎町では最近だね。ホタテはワカメよりはずっと後だね。(碓石・吉田力男さん)

●ノリ養殖の後はホタテ養殖●

これは養殖ノリ、青ノリでね(写真7)。爺さんと婆さんが綿入れ着てるから春、寒い時だ、1月か2

た50個持つてきて焼いて売るのが。それで売つたのは4人で必ず割るようになって、1人7千円とかもつてきたものです。(西館・武田トシ子さん・大正11年生まれ)

●天然ワカメ味はいくらけど、木の葉のように硬い●

天然ワカメは、養殖になつてからここ何十年と口が開いてないもんね。あつても獲らないからもつたいないね。天然ワカメは本当は味がいいんだけど、硬いからね、養殖と違って。自然に育つたものだから、天然ワカメは岩さ付いたものだったら実もしつかりしてるし、自然のものだから味もいいし。ただ、形や伸びが悪いんだよね。養殖ワカメは見た目だけはいいけども、正直いつて味はよくないです。

—(奥さん)天然ワカメは、本当に木の葉っぱみたいに硬いの。形も悪いし。(山根・鈴木祥正さん夫妻)

●ワカメ干しに高田松原まで行きました●

天然ワカメが大量に採れた時分には、陸前高田の松原まで干しに行つたんです。あそこは砂浜だから



8. テングサを採るテングサ突き (H25年10月)

今もノリ、マツモ、フノリは採ってるよ。ここでは3月の末頃から始まるのかな。俺もノリ、マツモが開口になると、たまに行くかなということもあるけど。3月から4月一杯ですね。ノリはあんまり早くても採れないんだ。ノリの開口は1年に2回、今年(平成25年)は1回で終わってしまった。3月の末頃だったかな。あんまり遅くなるとノリは硬くなつてしまつて、採りに行く人もいなくなる。フノリもヒジキもマツモも開口日は同じです。2度目の開口の後は開けつ放しだね。遅くなるとフノリも硬くなるんだね。マツモは黒いのであれば採るんだけど、遅くなると赤くなつてしまつて、採る人いなくなつてしまふね。ヒジキはお湯を通して干すんだね。マツモやフノリは生で乾燥するんだね。天然ワカメは今では開口しないね。養殖ワカメの刈り取りが2月

月。ノリに草が入っているので、草を取つてるの。草取つたら、タライに水入れて、ノリを丁度いいくらいにすく機械で、微塵切りにする。わたしは当時30歳代。この時代はまだ機械が入らない時で、ハサミでノリを切つたの。その後、自動的にノリをすく機械をいれた。わたし30歳代から50歳代まではノリで生活たてて、ノリ専門でないけど、半農半漁で生活たてて。昭和30年頃はノリが盛んになって門之浜湾さ養殖やつて、見事だったの。湾内さ、「シバ」ていう竹立てたの、それに網を張つて。浜の下からすつと湾内まで、それは見事だったの。それからカキ養殖もやつたね。ノリ止めてから、今現在はカキ養殖しています。

ノリのはみんまでホタテ養殖に切り替えただけで、わたしはホタテ養殖はしなかったの。浜おつかなくて、船に乗つて行つたけど、波にたまげてしまつて。でもホタテ組合はいつて、ホタテを焼いて売りました。碓石の岬に食堂があつただけけど、そこが商売止めたので、そこで、ホタテを焼いたり、干しワカメや塩ウニも売りました。塩ウニは四角い箱に入れて売つたの。塩ウニは加工して家に置いておくと、商人が買いにきたものでした。

ホタテ売りは碓石の岬で、碓石5地区の人が組合で順番で、4人が組になつて生で焼きながら売りました。わたしはホタテ売りが嫌でね、なかなか言葉が出なくて。知つている人には声かけるけど、旅から来てる人には声かけられない。やつぱり商売やつてる人でないんだめ。声かけないと売れないから。まず生のホタテ50個持つてきて、売れ具合みて、ま

末から3月に始まるからね。(三十刈・志田寅之進さん)

●テングサは昔の人は結構やつたね●

テングサは春になれば採りに行くんだ(写真8)。俺はやつたことはない。テングサ煮ると言つても時間かかるし。昔の人は結構やつたね。今は誰もやんねえ。トコロテンはお盆に食つたね。(泊里・鎌田吉夫さん)

●拾つたコンブは質がいいんだよ●

拾いコンブは天然コンブの開口日に拾つたり、浜が時化た後に拾うんがいいんだね。浜さ歩いて。毎日のことだからね、たまるんですよ。俺は主に大浜とタノシリ浜で拾う。あと黒石浜と三ヶ所かな。土手の浜といふところもコンブが寄るんだけど。赤土倉はあまりコンブが寄らない。大浜といつてツバキの木が一杯あるところあるでしょう。その浜に降りていけば拾える。朝の6時とか7時とかに行けば拾つてる人いる。コンブ拾いは早い者勝ちだからね。コンブの開口は1年に1回か2回だけけど、天候がよければ4日か5日続けて開けるんだね。まだコンブあるようだな、とみればまた口を開けるんだ。

拾つたコンブは品質がいいんだよ。コンブが開くと、みんな船で出て、カガミ(箱眼鏡)見て、コンブの束をカマで刈るでしょう。それをカマにかけて船の上に揚げるんだが、質のいいコンブほど、カマからすると抜け落ちるんだよね。それが流れ寄りますので、拾いコンブはだいたい質がいいんです。質のいいコンブは長いし幅がひろい、大きい



9. コンブ漁の口止めを知らせる旗。泊里漁港（H25年10月）



で、水の抵抗が大きくて抜けるんでしよう。

そこに干してあるので生なのは今朝（平成25年10月18日）拾ったものです（写真10）。束になつていのは台風の前日だったね。天候が良くても、今日干してその日で水分が抜けることはないんですよ。翌日も干して。この辺では「ハサカス」というんですよ。こんないい天気ですと干すと完全に水分が抜けるんですよ。まず完全に何ヶ月おいても心配ないようになるわけですね。アワビ開口の前に、コンブは「カガミドメ」になる。コンブ漁に行つていて、アワビ見かけると獲りたくなる。それをさせないためにカガミ止めをするんですね。（三十刈・志田寅之進さん）

●赤土倉漁港は大変なとこだったの…●

山根の戸数は約60軒あります。漁業しているのは3分の1くらいでないかね。專業は少ないね。專業は何人かだね。昔は漁師一本で食べられたの。でも今は厳しいもんね。本当に田んぼやってる人も、この部落には2軒しかない。畑は少々あるけれども、

●日和見係は文句言われるし、いつでも辞めたいんです●

浜の口開けの日を判断する日和見係は末崎では一人だけ。広田（陸前高田）は複数だけど、末崎は親の代から一人。複数いると自分都合も出てくるから、末崎は昔から一人です。これは楽ですよ、一人で決めるんですから。天気予報は今は当たる、だが波の高さはあまり当てにならない、基準になつているところがこの海なのかかわかんないから。それに透明度は何日というの天気予報では出てこない。海の様子にはわたしは見に行かないの。誰かが海に行つていから、電話で聞けばわかるんです。日和見係はまだ何年もやらないけど、文句は言われるし、いつでも辞めたいんです。

口開けは天然物が主ですから、フノリ、マツモ、ヒジキ、ノリとか、それが終わるとウニ。磯物の開



10



11



12



13

自分で食べる、野菜くらいしかないの。お金になるものはないの。漁港は赤土倉という、あそこまで通つて（写真11）。泊里部落の港は泊里漁港。今、泊里は無くなつたけど。

赤土倉って、あそこは船揚げるの大変なとこだったの。船の後に長い綱付けて、浜から50メートル離れたとこで巾着岩つてあるでしょう、あそこで来る波の様子を見て、7つに1つくらいは波が鎮まるんですね。それ待ってんの。自分で權ふたつもつて、後の人が幅のひろい權もつて、前の人が小さな簡單にできる權、竹代りにも何でもできるような權を積んでね。今は機械でやる（船を引き揚げる）からね。

小漁といつて、磯で漁する時には船外機でもできないこともないけど、スクリューの回転で泡が出るんですよ。泡が出ると、ガラス（箱眼鏡）に空気がついてね、海の中を見れないんです。だからネリガイつう、これで船外機の役割をさせて（操業する）。この漁法はね、1人3役やるんですよ。俺の場合左手でカキを操って、ミスカガミは口に齧つて。カギ（アワビ採取の鉤）、棹は右手で持つて。そしてこうやって獲るんだもの。片手でアワビでも何でも獲つてね。アワビに引っかけ、引くときに瞬間的に獲るんだから。岩に引つついてしまつたら獲りにくいからね、やつこさん（アワビ）を。だから慌てた人なんか、サーツと獲つた瞬間、カガミをくわえたまんま棹を引いてしまう時あるの、そうすると上からカガミのほうにカギがふつてくるから、カガミを壊してしまふことがあるの。そうすると一巻の終わりだ。（山根・鈴木祥正、ツネ子さん夫妻）

口は3月から4月1日まで。ウニは5月から8月盆前まで。10月中は天然コンブ、11月からアワビ。マダコはアワビと開口期間は同じです。アワビは今年（平成24年12月21日）開いて3回目。1年に5回開けるけど、5回開ける日和がない。準組合員はそのうち1回だけ獲つていい。準組合員に何回獲らせるかは、漁協の決め様です。われわれの組合では準組合員は1回だけと決めてる。ウニの開口は初日から5日目までは準組合員にも開口しています。アサリの開口もあるが、津波で海底の様子が変わつてしまつて、油も流されて、貝毒があるといけなから、ここ何年かはやめようと思つてます。（碁石・吉田力男さん）

●アワビの水揚げ量●

アワビ漁は水揚量からしたら、赤土倉からこつち、南浜です。アワビ2回目の開口では、アワビの

●アワビ漁には天性のものがあるんです●

わたしは浜はワカメとコンブ養殖だけ。でも磯のほら、アワビとかウニとか当然やってきましたよ。浜には小さい時から出ていましたから。あれは人に教わるもんでないです。アワビを見つけるとかは特殊だから。目が良くなければならないし、船の操作もできないといけないし、カギも使えないと駄目だし。天性のものがあるんです。努力した人にはかなわないけど、天性があり努力した者にはかなわないわね。60、70歳過ぎると駄目になるんだね、欲もなくなるしね。明日喰う米もないと、でない。今は2人喰う分あればいいからな、とか。だから獲らないというわけではないけれどね。爺さんは浜好きで、すごかつたけど。磯モノよりは天性のものもあるんでしよう。（碁石・吉田力男さん）

●日和見：昔の言い伝えがピタリと当たる●

天気は昔の言い伝えがあるんです。暖かさで寒さを自分で感じて、山が赤くなれば明日は雨とか。今は天気図が出るんだがね、昔の言い伝えがピタリと当たる。寒い時、コチ風（東風）が夕方一時間ぐらい吹けば、翌日はピタツと凪げるんですよ。春に南風が吹けば荒れるんだね。「春南 夢にも見るな」と言つた。今はほとんど天気図見てやつている人が多いんだね。天気図で低気圧がそこに在るからこうなるんだらうなど、勘だね。わたしも日和見を8年もやつたかね。平成11年にやめた。40から60歳代の人がやるんだ。（碁石・大和田良一さん・昭和14年生まれ）

●アワビ漁とアワビカギ●

水揚げ量は、北浜の細浦が329キロに対し、門之浜が5百キ、泊里が6百キ、これが南浜の側の水揚げですから、全部で17キ。アワビは三重県の鳥羽市の人たちが買つていくんだが、一号品だけ持つていくんです。はじめた人たちが自家販売するのを合わせて2キ。三重の人は実入りがいいのを持つていくんですよ。アワビが貝の殻よりへこんでいるのははじめて、貝殻の縁より盛り上がっているアワビを持つていくんです。「傷アワビ」というけど、傷がついてるアワビという意味ではないんです。「痩せアワビ」なんです。アワビはコンブが餌なんですけど、コンブがついたから、アワビの実入りがいいかと思ふけど、そうでもないんですよ。（碁石・吉田力男さん）

10. 拾いコンブの天日乾燥。三十刈にて（H25年10月） 11. 復旧半ばの赤土倉漁港（H25年10月） 12. アワビ漁から帰港した漁船。2月の開口は減多にない。泊里漁港にて（H26年2月） 13. アワビの検査。殻長9センチ以下は採捕禁止（H26年2月）



地区	1号	2号	自家用	合計
細浦	329.2	28.1	92.1	449.4
門之浜	570.5	215.0	175.4	960.9
泊里	643.5	85.8	135.2	864.5
赤土倉	192.3	7.4	55.3	255.0

H25年12月3日分 アワビ地区別水揚量 (kg)

から10時まで。昨年（平成24年）は4、5回開きましたね。アワビは12月17日の期間までんだけど、凧が良ければ27日くらいのこともあるね。凧が良くても普段は土曜日、日曜日には開けないんだ。漁協の職員が出ないといけなくなるから。それで、凧が良くても、続けて2日開けると必ず一日休むんですよ。

アワビのカギは今はほとんど綾里（大船渡市三陸町）で作るんじゃないかな。以前は米崎（陸前高田）にもあったんだがね。カギは焼き入れによって、固ければ欠けてしまし、甘ければぶるし…。口止めになって漁を終ると、カギを棹からはずして、ペンキ塗って、長屋に掛けおくんだね。アワビ棹は堅木だね。百年くらいのアササの木を削って作るんだがね。カギと棹の間に挟むホテは、竹を削って作るんだね（写真見）。自分で作っている人もあるし、漁協で売っているプラスチックのホテを買う人もあるし。2本カギはウニ獲る道具、アワビとウニと、てんでに棹持つてる。（三十刈・志田寅之進さん）

● 8月になるとウニは子をもつので…

ウニの口が開くと獲りに行くかな、6月の中あたりだね。（漁協の）組合員だとウニ獲れる。この組合は正組合員の株数の半分が、準組合員。この組

この季節になるとタラは浅いとこ、磯まで寄ってき種出すんだね。今は網にタラがかかってくる。タラはここではポインタと言んだよ。綾里岬までタラ獲りに歩いたもんだ。

ドンコは1年中、いつでも獲れんだ。メヌキは縦縄で針つけて、1回で20枚も30枚も揚げんだ。うまい人は何番目の針にドンコ喰ったかわかるんだ。縄は80〜105センチくらいの深さに入れるんだね。（泊里・鎌田吉夫さん）

● サケ縄やカレイ縄もやりました

サケ縄もやっつたし、底刺しのカレイ縄もやっつたね。針さしてね。カレイ縄の餌はエラコ。エラコはエムシと言うのが本当（標準語）だつて。私のやったの



14. アワビ棹につけた竹製のホテ。ホテはバネの役目をする竹材。明治・大正の頃は弾力性のあるヒゲクジラのヒゲを用いていた。今日では竹のホテを作れる漁師は少なくなった（H25年10月、泊里の作業小屋で）

合、端っから準組合員はアワビが1日、ウニが5日間と決めてるんでね。まだウニがある時に獲らせてもらうから準もいんだよね。ウニは今年（平成25年）は8月の10日あたりまでのびた。8月になると、ウニは子を持つためにね、実がとけてしまっただね。あまり遅くまで口を開けたくねえんだども、業者がウニ欲しいといえれば開けるんだね。（三十刈・志田寅之進さん）

● 櫓船でやった刺網漁

俺は櫓船の頃から漁をやった。昭和47年頃からは機械船。泊里から赤土倉まで櫓船では40分くらいかかった。カッコ船に船外機が入った今は、5分から7分で行く。刺網は碁石沖でやったんですよ、カレイ網とか、三枚網だったら、何でもかかるからね、ただ喰っていくだけの漁でしたが。でもこの頃は刺網やる人少なくなつたね。俺も最終的には網が壊れてね、止めてしまつたんです。

昔はイカ釣りもやっつたんですよ。今の子どもら、真面目にやれば漁業ほど収穫あがるものにはここにはない。漁業というのは深いんだ、いつまでも勉強なんだね。死ぬまでかかる。だから漁業なんて、と舐めるなよつて…。漁師といっても毎年いい漁ができる訳でないからね、悪い年もあるしね、努力しないとね。自分は沖に行っているでしょう、風でも来ると、自分の頭いれて、漁をやめて早く帰るとか、その読みがないのね。それを得るのに15年くらいはかかる。（碁石・大和田長一さん）

は、やっつたうちにいらんだろうけど、釣つことも少しはやっつたんです。サケ縄は許可制で11月1日からでした。3月頃まではサケ縄やって。縄の餌はイワシです。小細浦の河原冷蔵で買っていた。まだ西館冷蔵ができる前です。（碁石・吉田力男さん）

● タコカゴとイシャリ

今は大きな船でもタコカゴ（蛸籠）やってるから。タコカゴは何でも入るんだ。ミズダコでもマダコでも。資材はあったが、うちではやんなかった。みんなカゴは持つてんだけど、忙しいからやんない。門之浜さ行けば、いっぱいやってる。

前はタコ獲るつてば、カガミで見てカギで獲った。それから船静かに走らせながら、イシャリを引っ張って。イシャリは針金をカギ形に曲げて、重しの石を抱かせた道具。前は5月、9月の口開けだったが、今はアワビと一緒に、アワビの口開かねば、タコの口も開かない。イシャリは今でもやるよ。タコ来たと言え、みんなやるんだ。だけど今年（平成25年）は波があつて、まだ行く日ないんだ。（泊里・鎌田吉夫さん）

● 曳き縄ではイナダやカツオを曳いて

曳き縄ではイナダやカツオ曳いたり、フクライ曳いたり。フクライはカツオの形をしてる、マグロの子でねえのか。イナダは6月から曳くな、もう10月はイナダは終わりの季節。カツオは夏、6月、7月あたりかな。10月まで釣れたことないね。フクライもカツオと一緒にの時期。今は泊里では菅野さん以外

● 綾里まで行ってイカ釣つて

イカ釣りは小さい船、カッコでも行った。今頃（11月）からマイカ釣りに歩いたんだね。電気（集魚灯）つけて。今は7色の電気。船で釣るイカ釣りはやった。俺はトンボから始まつたんだ。結構この人は行ったんだ。角をつけてやったの。綾里の方まで行ったこともあるんだ。船外機を2つ付けて。カッコではないよ。40年くらい前だ。大昔、子どもの頃はアタリでやっつたんだ。（泊里・鎌田吉夫さん）

※トンボ・20センチほどの陶器製の柄の先に弓なりの番線をつけ、その番線の両端からたらしした糸に針をそれぞれ一本つけたイカ釣り道具。トンボが羽を広げた形に似ているのでこの名がある（柄が胴体で弓型の番線が羽）

※角・鹿や牛、水牛の角を加工した疑似餌のイカ釣り針。トンボなどのイカ釣り道具の糸の先に付けて使う

● タラはここではポインタって言うんだ

延縄は碁石地区では古くからやっていたんだね。俺は自分の船ではやってない。養殖ばかりだ。俺、中学校あがるとすぐ、地元の小さい船に乗ったんだ。熊野丸といつて、西館の船だった。イカ釣りだの、コオナゴの棒受け網だの、他には網刺しだのつてしばらくやっつたんだが。7、8年乗ったんだ。熊野丸は12センチくらいあったかな。ここでは大きな船だったよ。延縄もやっつたけど、これはタラとかドンコ、メヌキだの、延縄でやっつた。タラはすぐ近くで獲るんだ。1月、2月になれば、すぐ沖で獲れんだ。

やっている人いるのかな。門之浜はやってる。門之浜は曳き縄好きだから。（泊里・鎌田吉夫さん）

● オラホのカッコ船つうのは四角な造り

オラホの船つうのは「カッコ船」っていつて、板を張り合わせて。タナ（柵）つうのはない。カッコつうのは四角な造りなんだ。だから片方に重量かけると、その重量で舟底まで見えるくらい傾くんです。そこに波が来たり風が吹いたりするとひっくり返る。カッコ船で操業してる時は、そのカッコ船の近くを通る船は徐行するもんだつたんだよね。波で船をひっくりかえさないように、ゆっくり走らねばなんねえども、最近の人は、人が釣りしてるのも何もかまわない。暴走族だ、海の。（山根・鈴木祥正、ツネ子さん夫妻）

● カッコ船、入手に2年かかった

自分のカッコは津波で流してね、尾崎豊さんが投げておいたカッコ船をもらったの。震災後からカッコを探して、手にいれるまで2年かかった。小漁には木のカッコ船の方がいいですよ。尾崎豊さんは同級生だ。尾崎さんのカッコが津波で流れて、岩に引っかかって、壊れていた。しばらく見ていたが、尾崎さんにカッコどうするのと聞いてみたら、もういらないうん、もらって壊れたとこを自分であり合せの材料で修理したんです。船大工には頼まなかつた。それが泊里漁港においてある片田丸。津波で流したカッコを造ってくれたのは門之浜の村上益夫さん。昨年（平成24年）亡くなつたけど、





15. 志田寅之進さんの木造カッコ船、片田丸。泊里漁港にて(H25年10月)。カッコ船は長さ18尺、幅2尺8寸5分、底板は1寸8分、上板は1寸2分のスギ材を用いて造られる。木造カッコは磯漁には使い勝手がよく、震災後にも基石と中央地区で1艘ずつが新造された

葉の銚子(ちょうし)のイワシ流し網に行っただんだって。15歳で一人前もらって、銚子さ行ったんだもの。熊谷太一という人の善宝丸という船。15斗ぐらいあったんだね。熊谷恒治という人が機関して、その奥さんの兄の太一さんが船頭していたんだね。カシキして一人前もらったの。学校一緒に終わった人と2人だったの、三十刈の鎌田タケオさんと乗ったんだ。船には7、8人乗って行ったんだ。銚子までは焼玉エンジンだもの、何日もかかって行ったの。銚子沖で、銚子から日帰りの漁だったね。無線などないんだもの。ここから2艘、門之浜の船も一緒に行っただんだね。

船大工やって、船造る作業場をもっていたね。門之浜の鎌田鉄工あるでしょう。小学校のあたりにいたね。この辺にはカッコ作る人は3、4人あったんだけど、最後まで残ったのが村上さん。今、船造る人は広田(陸前高田)にしかないんだ。太田団地(末崎町小河原)の占部という人も造ってるのはカッコ船だったね。村上さんの方が古いのかな、昔、広田にいたとき帆船造ってた人だから。帆船なくなつてから、門之浜でカッコ造るようになったんだね。泊里の大和田さんという人もカッコ船剥いだ人なんです。昭和の30年代の初めまで船剥いでた。(三十刈、志田寅之進さん)

●中学校あがって善宝丸で銚子に行った●  
俺は17年生まれ。中学校上がって、すぐ春に千

イワシ流し網の漁は7月までだったかな。それが終わって、帰ってきてからサンマ船行っただんだ。サンマ棒受け(網)でね。細浦の船だった。使いあげてたのを借りていったんだ。エンジンも焼玉で大きいかから。恒治さんの奥さんのお兄さん、小田の人で、後藤コイチ(?)という人の船だ。サンマ棒受けは8月の末あたりに出たな。北海道の花咲港(根室市)をめがけて行くんだね。そして西風の吹かない頃に帰ってくるんだね。津軽海峡は西風が吹くと荒れて難所だからね。それでサンマの最後の漁場は三陸沖で、大船渡港や、細浦港に揚げるんだね。

サンマやった後は細浦のイカ釣り専門の船乗ったんだ。村上フクジさんの船だ。村上さん、昭和2年生まれで宮古水産(現・岩手県立宮古水産高校)出た人だったね。ワカメのことも何でも、海のことには詳しい人だったね。この船でのイカ釣りは日本海に行った。新潟まで行って、それから出んだ。ヤマト



16. 泊里漁港の朝。震災後に新造したFRP船が並ぶ(H24年12月)

タイに行っただんだね。ヤマトタイには一晩もかからねえんでねえか。朝出れば夕方には着いた。新潟港には4月頃行って、10月あたりまでいたんでねえかな。半年くらい行ったんでねえかな。イカ釣り専門だったね。行ったのは嫁さんもらってからだ。昭和27、28年に結婚したんだ。スルメ釣りは嫁さんもらってからだ。35歳ころからだ。地元では漁はあまりしなかったね。(泊里・熊谷克夫さん)  
※ヤマトタイ・大和堆。日本海中央部にある海底山脈。イカ的好漁場として知られる。

# 海の一年

種別	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	備考
ヒジキ													時期が遅いと赤くなってきて美味しくなくなる
マツモ													時期が遅いと固くなる
フノリ													おがる(成長する)のが遅いと固くなる
ノリ													土用ワカメを採って口を止める。養殖を始めてからは年に1-2回の開口
ワカメ													彼岸過ぎに開口する
コンブ													今はほとんど採らない
フナグサ													年間通して採取できるが、5月・6月が一番おいしい時期
ホヤ													開口日が少ないと翌年1月に持ち越すことも。正月の資金になった
ウニ													子を成す時期に磯に寄ってくる。昔の人はヤスで突いた。ポンタと言う
アワビ													年中獲れるが美味しいのは10月~3月頃まで
タラ													深さ80-100mの、海底に根(岩礁)がある所で良く釣れる。枝針のついた総縄に喰わせる
ドンコ													疑似餌で釣る
メヌケ													開口日はアワビと同じ。昔はカギで獲ったが今はカゴで獲る
イナダ													カッコより大きな船で釣るがカッコに船外機をつけて釣りに行くことも
カツオ													
ワライ													
マダコ													
マイカ													
ワカメ	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	7月初旬種とり。10月まで育成。11月頃に芽を幹縄に移植 1月中~2月中旬に間引きし、2月下旬頃から刈りとリ
コンブ													種は宮古市や田野畑村から購入。ワカメ縄の下に吊るす
カキ													種苗がけいた原板を塩釜、松島から購入。2年目に収穫
ホタテ(半成貝)													半成貝は漁協経由で北海道から購入。2年で養成
ホタテ(稚貝)													稚貝は岩手県野田村から購入。殻長6~7cmで耳吊りをする。 3年で養成

# 小漁カレンダー

# 養殖カレンダー

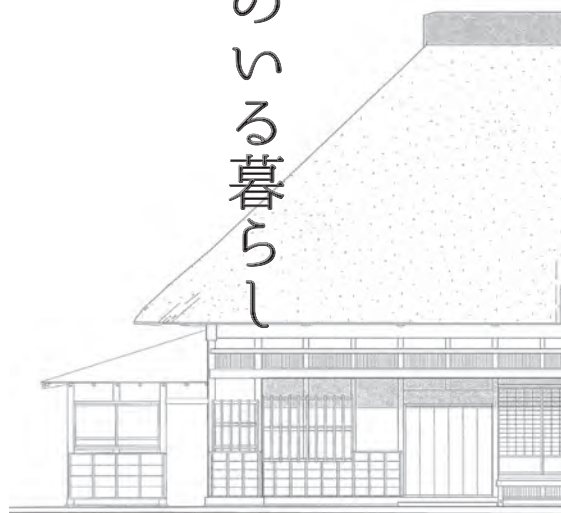
種別	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	備考
ワカメ	間引き	収穫					種つけ	種苗を海で育成					苗を幹縄に移植
コンブ													種苗を幹縄に移植
カキ	収穫		間引きと養成					温湯処理			収穫		種苗がけいた原板を塩釜、松島から購入。2年目に収穫
ホタテ(半成貝)	収穫									半成貝			半成貝は漁協経由で北海道から購入。2年で養成
ホタテ(稚貝)	収穫									稚貝			稚貝は岩手県野田村から購入。殻長6~7cmで耳吊りをする。 3年で養成



またこ



# 住まう 気仙大工のいる暮らし



## 1 吉田力男家の住まいと暮らし

### ●吉田力男さんの家●

吉田力男さん（昭和18年生まれ）の家は碓石集落の中で海を見下ろすやや高台に屋敷を構えている。吉田家の祖先は明治時代のはじめまで泊里の海岸近くに住み、浜稼ぎで暮らしを立てていた。海はいつなるとき津波が来るかわからない。そう思って明治16年にそれまで山だった高台のこの土地を買って、宅地と畑を造成して現在の家を建てたという。力男さんから数えて5代前の四郎治さんの時代であった。四郎治さんの生年はわからない。

この家の屋号は「滝の上」という。高台でありながら地下水の豊かな土地柄で、屋敷内に水が湧くところが2ヶ所在り、昭和30年代の終わり頃までは水がコンコンと湧き出ていた。その2つの水の流れが屋敷内で合流して、そのまま崖から滝のようになつて海へ落ちていたことから、屋号の「滝の上」のも

ととなった。その滝は子どもらが海で遊んだあとのシャワー代わりによく使ったという。湧水は現在も湧いているが、以前に比べると水量はずっと少なくなった。それでも井戸は今でも飲み水以外の用に使い、池の水も湧水を引いている。

母屋の普請は造りが終わって間もない明治17年（1884）から始まり、翌々年の明治19年に完成して家移りした。母屋には特にこれといった呼び名はない。建てられた当初は草葺きで、規模は現在と変わらないう。ただ母屋の西側に下屋が付いていた。その下屋は今も取り払われている。この家を建てたのは陸前高田市小友の棟梁であった。小友は気仙大工の多くいた村である。現在、碓石集落あるいは末崎地域全体を見ても、草葺きの民家を見ることはできない。ただ明治初期に地域の棟梁の手によって建てられた民家は存在する。そうした民家のなかにはもとは草葺き屋根だったという家がある。

### ●ナガヤのこと●

母屋の西側には2階建て草葺き屋根の長屋門が建

てられていた。吉田家ではこれを「ナガヤ」と呼んでいた（写真8）。南北に細長い建物で、1階の中央部分に幅約2間の通路が取られていて、そこを「チュウモン」と呼んでいた。チュウモンとは中門のことでも入口あるいは玄関という意味がある。東北地方の民家で有名な秋田中門造りの「チュウモン」である。この場合も入口をさす。吉田家の中門には木製の観音扉が付けられていて、その片側には潜り戸があった。そこから屋敷に入るとちょうど母屋の前に出るようになっていた。

ナガヤの1階の通路を挟んだ北側は馬小屋になっていた。昭和27年か28年頃までそこで馬を1頭飼っていた。その後、牛に代わった。馬や牛は農耕に使うためと畑に入れる肥料を取るの大きな目的であった。牛は昭和38年頃まで飼っていた。通路の南側は穀物蔵になっていた。ここには収穫した麦や豆などを入れた。カラウス（唐臼）もここに置かれていた。当時吉田家ではコメは作っていなかった。

ナガヤの北の端、馬小屋の隣は床を張った物置になっていた。しばらくここに叔父さんが住んでいた。またナガヤの2階は物置になっていて馬の飼料になる干し草や稲わら、豆ガラなどを積んでおいた。家畜を飼っていた時代は稲わらでもスキでも豆ガラでも、干し草すべて押切で切つて家畜の飼料にしていた。

ナガヤ西側の外には便所があった。ナガヤは昭和40年代半ばまで古い形のままあった。

### ●母屋の間取り●

母屋は平屋建てで、カッテの上だけ2階がある。ただ2階は滅多に使うことはないという。この家を建てた気仙大工の気質上の特徴の一つとして、その作風の独創性があげられる。個々の棟梁が独自のアイデアを持つて家普請に臨んだということか。

明治19年完成時の間取りは、いわゆる「喰い違い四つ間取り」と呼ばれる、幕末から明治期に全国的に見られた形を基本にしている（次頁「平面図」参照）。ザシキ、デトザシキ、オカミ、カッテの4室が喰い違いに配され、それに広い土間がついた形として見て取れる。間取りという点では漁家としての特色は薄く、一般的な農家としての特徴を持っている。ただ入口部分が半間奥まっていること、床の間の裏に廊下があること、ザシキ、デトザシキを8畳間とせず、10畳間と6畳間の組み合わせにしていること、長方形断面（五平）の柱が数ヶ所に用いられていることなど、他の家とは一味違った作りをしている。理由はそれぞれ伝えられていて、入口を半間下げた理由は雨や雪のときに傘を指す場所をとったためとか、トコの背後の廊下は冠婚葬祭の時の配膳を考えると、などである。冠婚葬祭は住まいの持つ大きな役割の一つであった。ザシキ、デトザシキを10畳と6畳にした理由も冠婚葬祭の時の使い勝手を考慮したとされる。五平の柱は滅多に見ない手法なので建てた本人に理由を聞いてみたい気がする。

### ●昭和の大改修●

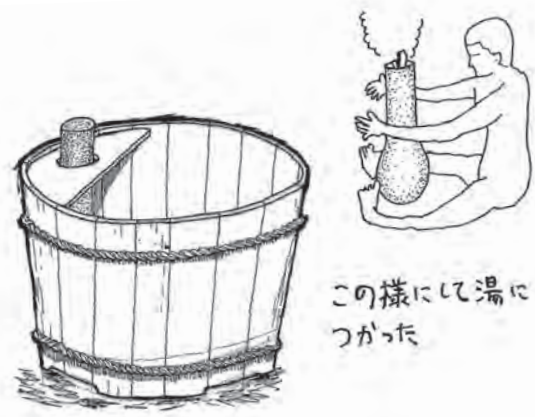
吉田家は創建から75年ほど経った昭和34年（1959）に、それまでの草葺きから現在の瓦葺きに改築した。その時は間取りはあまり触らなかつた。この地域の草葺き屋根は、ほとんど麦ガラで葺いていた。一般に草葺き屋根というと、「茅葺き民家」という言葉が表すように、茅スキスキで葺くことが多い。だが、それは茅が入りやすい地域のこと、この地域ではスキは大切な家畜の飼料であった。稲わらも他の干し草もみな家畜の飼料であった。ただ麦ガラだけが沢山あり、屋根葺き以外にあまり使いようのない資材であった。麦ガラはスキなどに比べると長さが短い。またツルツルとよく滑るため、屋根を葺く場合、厚く葺くことは難しい。麦ガラで葺いた屋

根は全体的にべったんこな印象となる。幕末期に撮影された写真に残る草葺き民家の屋根が総じて扁平な印象なのはこの葺き材によるところが大きい。昭和34年の屋根の大改築を請け負った棟梁は、梅神（末崎町）の細川棟梁であった。やはり気仙大工である。その時の小屋組をかけた直した写真が残されている（写真3）。吉田力男さん曰く、「小屋組みに使った材木だけで一山分の木を伐つた」そうだ。写真を見てもそうした言葉がうなづけるくらい、この新規の小屋組は豪壮であり、手間と材料を惜しまず注ぎ込んだ熱気が写真から伝わってくる。一例をあげれば軒先のタルキの上の部分に広小舞という材料がある。普通は1段で済ませるところを、吉田家では3段に入れている。そうすることによって建物が一層豪華に見える。広小舞は屋根の隅棟に近



1. 現在の母屋の様子 手前はナガヤを民宿用に建て替えた建物 2. 背後の斜地から見た母屋 前面は海  
3. 昭和34年（1959）、麦ガラ葺きから瓦葺きに大改修した当時の様子（吉田氏提供。以下、古写真はすべて吉田氏提供）





7. 鉄砲風呂 鉄砲の周りは温かいので抱くようにして湯につがった



6. オカミからザシキ方向をみる 障子は取り替えられているが他は昔のまま

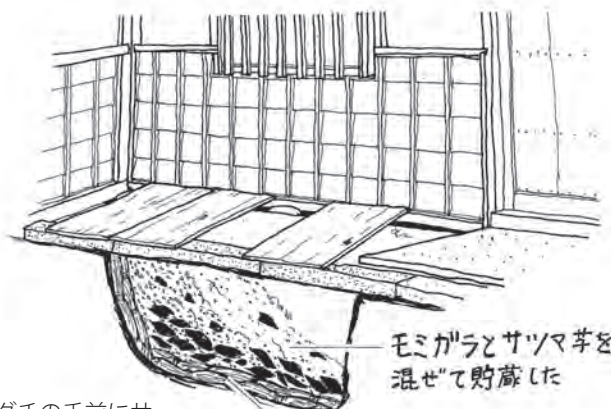
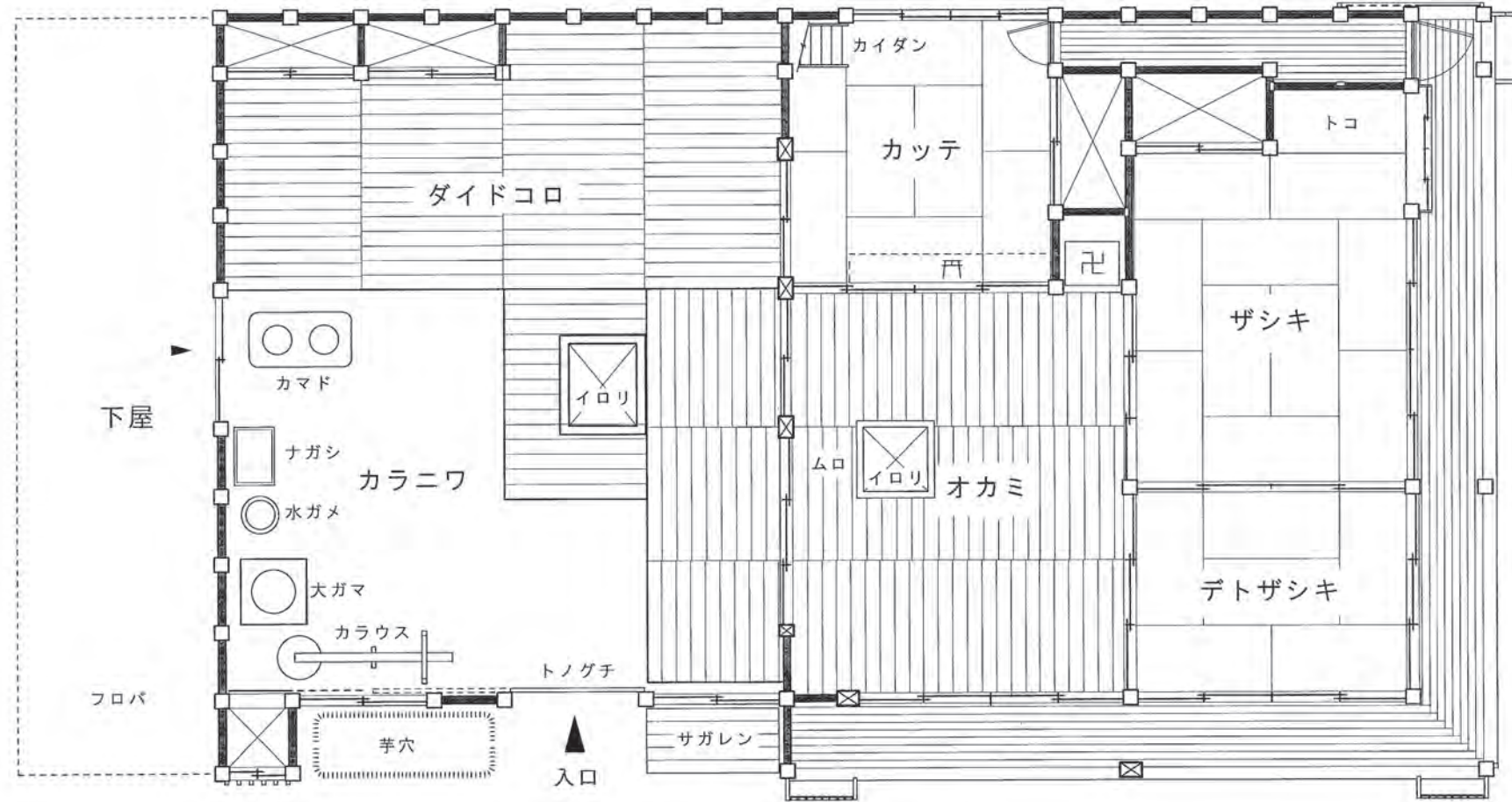


5. オカミに祀られた神棚 天井が15尺(約4.5m)と高いのはそのためか



4. ザシキ、デトザシキでの婚礼(昭和45年)

▶吉田家の平面図(明治19年当時の間取りの復元)



10. 芋穴 トノグチの手前にサツマイモを貯蔵する大きな芋穴が掘られていた。所々、板でフタがしてあった



9. カラニワのイロリを使っての煮炊きの様子



8. 以前のナガヤ 2階が半間せり出しているのが特色の一つ

●オカミの使い方●  
オカミは15畳ほどの広さがあり、イロリがある(写真6)。このイロリでは薪は燃やさない。おもに炭を燃やす。オカミは普段板の間だが、嫁入りや葬式

づくにしたがって反りがかかるので、その分大きな材料から削り出さなければならぬ。それが屋根の四周に、それも3段である。手間と材料は桁違いにかかることになる。それをよしとするところが気仙大工の真骨頂であり、またそういう仕事を受け入れた建て主らの気概に頭が下がる思いがする。建て主は決してお大尽でない人だったところがよい。そのあたりのことはまた別の機会に触れるとして、もう少し住まいについて述べることにする。間取りもいくつかの点で新しさを工夫がみられて興味深い。

など、あるいは会食などをする時にだけ、畳を敷き詰めて使った(写真4)。畳は使わない時は縁側などに積み上げておいた。天井も以前はザシキと同じ天井が張られていたが、現在は改造されている。オカミの北面の鴨居の上には3つの神棚が作られ、そこには3様の神様が祀られている(写真5)。中央に祀られているのは「天照皇太神宮」で、向かって右隣は「御年神大王串」、左には「氷上三柱神社」のお札がそれぞれ祀られている。毎年正月には畳が敷き詰められ、イロリに炭が起こされ、神棚の下に一面にありつたけの掛け軸を掛けて部屋を飾った。オカミのイロリは普段は蓋をして置いて使わない。何か行事がある場合、それが冬季に行う場合などに、ここに炭をおこして暖を取った。

イロリの脇の床下にはムロがあり、そこに木炭を入れておいた。そうしてイロリで正月の餅を焼いて食べるのが何よりも楽しみであった、と力男さんは話しておられた。オカミには仏壇も祀られている。北面の一番東寄りの半間が仏壇を置く場所となっている。

●カッテの使い方●  
カッテはオカミの北側にある8畳間で、年寄りの部屋に使っていた。この部屋も常時畳が敷かれていたのではない。杉板と角材で作った畳と同じ厚さ、同じ大きさの板畳というパネル状にした板を、畳の代わりとして所々に敷いていた。その板畳の上には、木で枠を作り、稲わらの葉の部分だけすくって乾燥させたものを敷き詰め、敷布団の代わりにしていた。稲わらの葉だけを乾燥させたものをワラフクと

カッテはオカミの北側にある8畳間で、年寄りの部屋に使っていた。この部屋も常時畳が敷かれていたのではない。杉板と角材で作った畳と同じ厚さ、同じ大きさの板畳というパネル状にした板を、畳の代わりとして所々に敷いていた。その板畳の上には、木で枠を作り、稲わらの葉の部分だけすくって乾燥させたものを敷き詰め、敷布団の代わりにしていた。稲わらの葉だけを乾燥させたものをワラフクと



いい、布団皮に入れて藁布団を作ることよく行われた。掛け布団は今と変わらない。

カッテはザシキの裏の廊下へ通じていた。家で会食などがある時はオカミにもお客が座るので、客の前を通らずに配膳ができるようにと、トコの裏の廊下を作った。冠婚葬祭を各自の家でやらなくなった。現在はこの廊下は物置となっている。またカッテの天井は踏み込み天井になっていて、小屋裏を利用してきるようになっていて。そのため小さな階段が部屋の北の隅に備えられていた。現在は希にしか使わない。

●カラニワとダイドコロ●

カラニワと板敷のダイドコロを合わせると間口4間×奥行約5間で20坪近くある。その中央辺りに畳半畳大の土間イロリがある。土間イロリには大きな自在鉤がかかっている。日常の食事の煮炊きや魚焼き、普段は明かりにしたり暖を取ったりで一年中火を絶やすことはなかった(写真9)。イロリを囲む四方が板張りで腰を下ろせるようになっていた。

カラニワの北半分は板敷きになっていて、ダイドコロと呼んだ。ダイドコロには作り付けの2間の戸棚があつて、食器などをしまっていた。食事の用意はおもに土間でおこなう。カマド、ナガシ、水ガメや大ガマもカラニワに置かれていた。またカンディヤ棒という鍬の柄のような棒で、豆フチや麦フチ(脱穀)もカラニワでおこなった。カラウスでコメを搗いたり農作業をする場所でもあった。カラニワの南側には沖が見える窓が付いていた。

●芋穴とサガレン●

カラニワの南の出入り口をトノグチといい、大戸が立てられていた。吉田家ではトノグチが半間奥まっているので、その凹んだ部分を利用してトノグチの手前左手に芋穴が掘られていた(図10)。大きさは3尺×9尺×深さ4尺位で、芋穴の壁と底は、土の上からセメントなどを塗って崩れないようにしてあった。その上に藁束をたて、底にも藁束を敷いて直接芋がセメントに触れないようにして保存した。

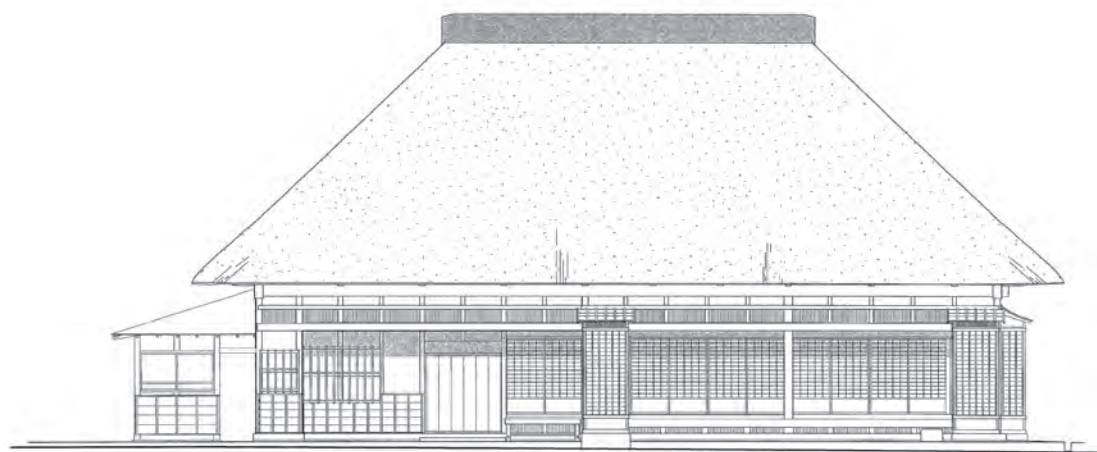
芋穴の中に食用のサツマイモを入れた。芋は籾殻と一緒にまぜて貯蔵し、芋穴の上には所々に板を載せて蓋をしておいた。

トノグチの手前右手にはサガレンと呼ぶ畳一畳ほどの縁台が置かれていた。サガレンとは「下がり縁」の詰まったものか。隅々まで丁寧に作られた可動式の縁台で、力男さんのお婆さんがとても気に入っていた。天気がよい日はこれを東西南北四方が見渡せる場所に出して日がな一日針仕事などをしていた。

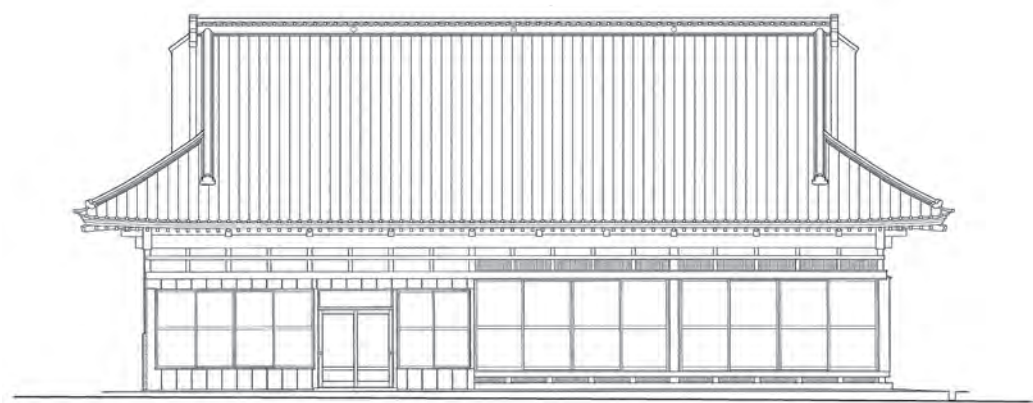
●鉄砲風呂●

母屋の西側には母屋と同じ長さで下屋が出ている。その一番南の部分に風呂場があつて、中に鉄砲風呂が置かれていた(図7)。鉄砲風呂というのは木で出来た湯舟の中に、口の直径が25寸位の鋳物で出来た筒を落とし込み、その中に上から火のついた薪をくべて湯を沸かす風呂である。鋳物の筒は底にくくって太く丸くなっていて、その形状は鉄砲というよりは、それより大型の大筒に似ている。大筒

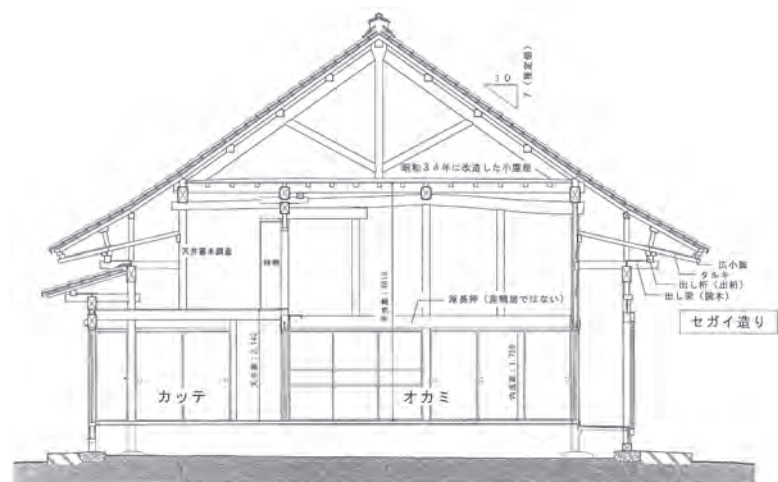
▶立面図(復元)



▶立面図(現状)



▶断面図(現状)



▶平面図(現状)



13

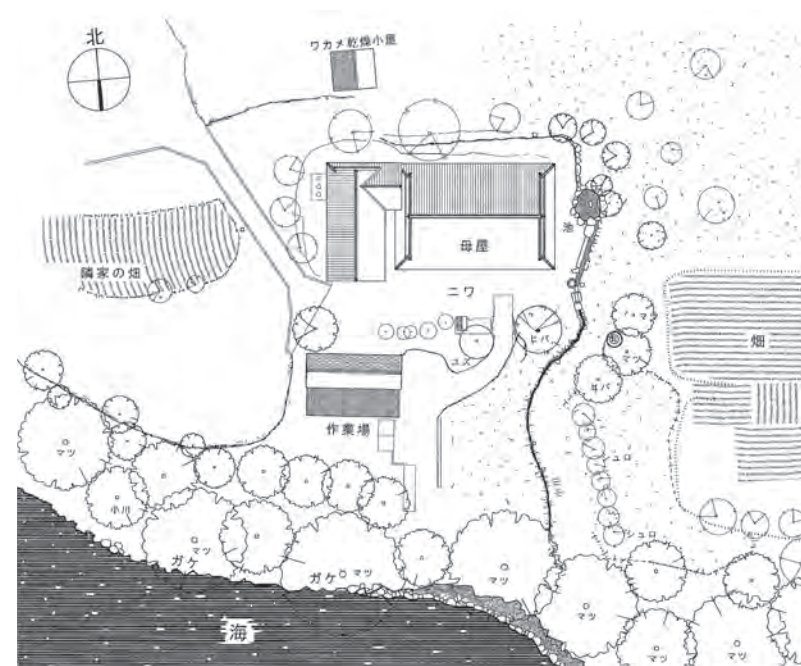


14



15

13. 軒先の出し梁先端の絵様のついた肘木は気仙大工ならではの  
14. 母屋の元カラニワ上部の精緻に組まれた小屋組  
15. 昭和40年代頃の戸袋



屋敷配置図(現状)



11 吉田家の番犬マールは人懐っこい  
12 母屋より一段低い位置に建つワカメの作業場



12



の底の部分に焚き口はない。もちろん、湯の中にあっても鉄に触れば火傷をするが、鉄の周りの湯は他より温かなので、大筒を抱くように、なおかつ触らないよう注意して風呂につかった。風呂が済んだ後は鉄砲を取り出して逆さにし、中の灰や燃え差しを出して掃除をした。風呂に入るのは7日から10日に1度の割合だった。水道のない時代には水汲みは子どもの役目と決まっていた、子どもにはなかなか大変な労働であった。

●「から」下屋について

下屋は杉皮葺き寄棟屋根を持つ建物で、杉皮を葺いた上に割竹を置き、釘で止めていた。さらにその上から海岸で扁平な石を探して来て屋根のところに載せていた。扁平な形の石とは、ここからそう遠くない宮城県石巻市雄勝あたりで、天然スレートとしても使われた黒色の粘板岩を産出するが、その系統の石かと思われる。

下屋の下の地面は全体に掘りくぼめてられていて、風呂場から出た水のほか、ナガシから出る使水なども溜めて肥料にした。それをタメといった。下屋の中間に、母屋とナガヤを結ぶ幅が5尺ほどの通路があったが、タメの上に板を渡して通っていた。

下屋の北側の部分は物置になっていた。物置は土間と板敷きが半々で、板敷きの部分は味噌や漬物などを作って貯蔵する味噌部屋であった。土間には大根や芋などを貯蔵した。

る。その特徴としてはいくつかの点があげられる。

●軒をセガイ造りで飾る

セガイ造りとは別名、出し桁造り(あるいは出桁造り)とも呼ばれる軒裏の装飾法の一つで、本来の桁の外にもう一本の桁を出し、それを腕木で支える構造をいう。和船の船梁が船べりから突き出して柵を支えることに由来するのから、「船外」という言葉が転化して「セガイ」となったという説などさまざまある。17世紀末には既にセガイ造りの事例が山形県の農家にみられる。藩政時代には、藩令で名主階層



入母屋造りの民家

2

気仙大工と碓石地区の家屋

●碓石地区の家屋の特色

都会から来た者にはまるでお城を思わせる豪壮な印象の家屋が碓石地区には多い。それは碓石だけでなく、大船渡や陸前高田でも同様で、これらの多くの家屋は、この一帯を根拠地とするいわゆる気仙大工が建てたものだ。

豪壮な家屋が建ち並んでいる光景は何も最近のことではなく、この地方では一昔もふた昔も前からのことであったようだ。今日では瓦葺きの屋根となつたこれらの家屋は、昔は草葺き屋根であり、30年前にはまだ草葺き屋根を乗せた豪壮な家屋が点々と見られたそうである。草葺き屋根に混じって天然スレート葺きの家も見られた。町場には古い造りの商家も建ち並んでいた。

この地方に住む気仙大工については、既にいくつかの研究書が刊行されている。その専門的な知識や技術の体系などは脇に置いて、実際に大船渡市域なり碓石5地区を歩いてみると、なるほど素晴らしい造りの住宅が多いことに驚かされる。もちろんすべてがすべてというわけではない。少し唐突な話になるが滋賀県彦根市に、慶長11年(1606)に建てられ、国の重要文化財に指定されている彦根城天守閣という建物がある。その建物を手本にして建てたのではないかと思ってしまう程、この地域の家々はしっかりと、しかも美しく建てられている。

以上でないと造れなかった藩も多かった。それだけに禁令がとけて自由に作れるようになった明治以降では、庶民の願望でもあったセガイ造りが関東地方や東北地方を中心に広く造られるようになった。

●屋根はきまって入母屋造り

この地域も明治時代までは草葺きの家が建てられていた。屋根葺きの素材は茅ではなく麦ガラが多かった。ちなみに茅とは「屋根を葺くのに用いる草本の総称」(広辞苑 第四版)で、茅という固有の植物名ではない。明治以前も以後も、この地方には麦ガラとは別に、天然スレート葺きの家が存在した。天然スレートの産地は、この辺りでは宮城県石巻市雄勝町。粘板岩の石を厚さ6ミほどに剥いだものを長方形や魚のうろこ型に整形して屋根葺き材にする。天然の素材とは言え、手間がかかる葺き材で費用も高かった。

その後セメント瓦が昭和30年代まで使われた。現在は釉薬を施した耐寒瓦が主流となった。瓦葺きの時代になると、屋根の形にも変化がみられ、それまでの寄せ棟、切妻といった形から入母屋屋根が好まれるようになった。入母屋屋根はテリや反りを付けることによって、屋根としてもっとも見栄えがするため、この地域の人々に好まれたようだ。

●屋根に軒反りとテリをつける

屋根の「反り」とは自分から見て左右方向の反り返りをいい、「テリ」とは奥行方向の反り返りを指す言葉。軒の曲線は「反り」で、これを軒反りという。

●気仙大工の棟梁の話

地域のある棟梁が、この辺りの家屋について、こんな話を聞かせてくれた。

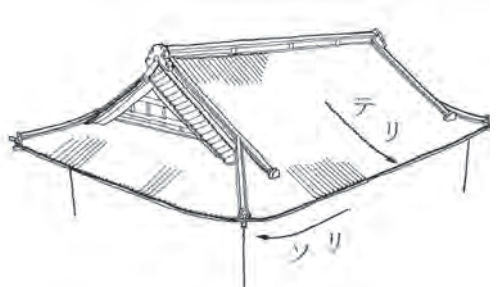
「この辺りの人は家を建てる時に『どうか皆さん、一生働いてきた自分のその働きを見てくれ』という思いで家を建てるのだ』そう。そして実際に建物を建てる棟梁の側も、簡単な図面を建て主にみせたあと、『わかった。あとのことは一切私に任せてくれ』といって自分の持てる技をすべてつぎ込んで仕事にかかる』のだ。工期や費用のことは二の次だという。そして続けてこうも言った。

「屋根にテリやソリ(つまり曲線や曲面)が無いような家では、建て主としては承諾できかねたし、建ても自分の家とは認めなかった。だから気仙大工は自ら励んで難しい軒反りやテリを勉強し、腕を磨いたもんだ」と。外見が第一で間取りは二の次でよかったそう、外見が素晴らしい家でも間取りは意外に古臭くて使いにくいこともあったそう。

そうした家は新しい家にも多いが、築50年、100年経っているような家もある。浜に建てられていた家は津波で流されたが、少し高台に上れば、気仙大工の建てた家は今日でもまだまだ見られ



セガイ造りの軒



ソリとテリ

棟部分の曲線も「反り」で、こちらは棟反りという。それに対して屋根面の奥から手前に対する曲線を「テリ」という。ちなみにテリの反対に屋根に丸みをつけることをムクリという。この地域の家屋の屋根にはこの反りとテリが必ず入っている。それによって屋根のみならず建物全体に立体感と緊張感を増大させる効果があり、見栄えが増すことになる。

●玄関部分を角屋にして出す

角屋とは間取り上、母屋の外壁線から突き出して造ることを言う。南部曲り家を想像して頂ければ分かり易い。曲がった部分が母屋から突き出ているので、この部分を角屋という。この地域の住宅は玄関を角屋にして建てる家が多い。そして玄関の部分にそこだけの屋根をかけている。それも切妻屋根や寄せ棟屋根ではなく入母屋屋根をかけている。これもやはり家が豪華に見えることを意識してのことであろう。この地域は雪はそれほど深くないので、同じく玄関を角屋とする秋田中門造りとは別の意図があると考えられる。中門とは入り口あるいは玄関という意味であり、秋田中門造りの玄関は母屋の雪が



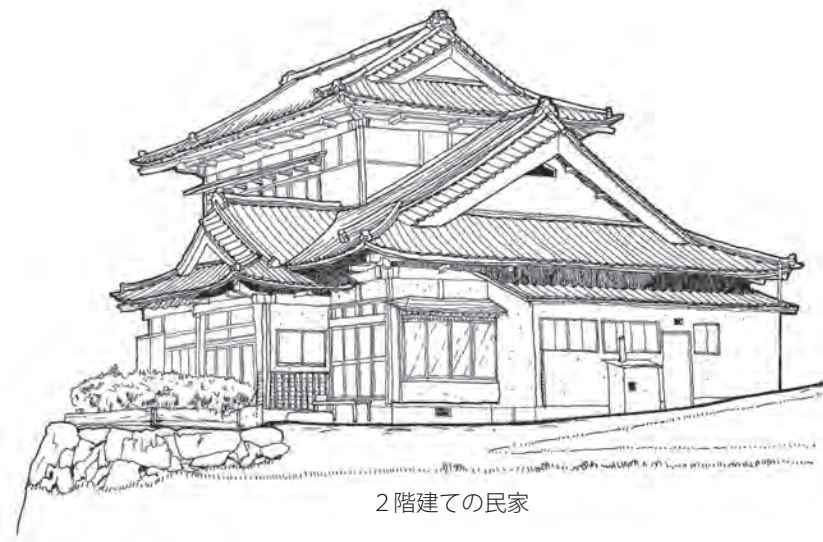


玄関部分が角屋になった民家

落ちてきて入口を塞がないようにするための工夫であった。

● 2階建てにし、  
それでいて2階を総二階にはしない ●

平屋の家もあるにはあるが豪華さでは2階建てが勝る。それも間取りの中央部分だけを2階建てにして、1階の入母屋造りの大屋根が2階を取り囲むようにする。2階も入母屋造りの屋根が付き、1階の大屋根と2階の中ぐらいの屋根と、さらに玄関部分の小ぶりの屋根が合わさって、建物全体の重厚感がいつそう強調されている。総2階建てにすると1階部分の屋根が必要なくなり、大中小の屋根が作り出

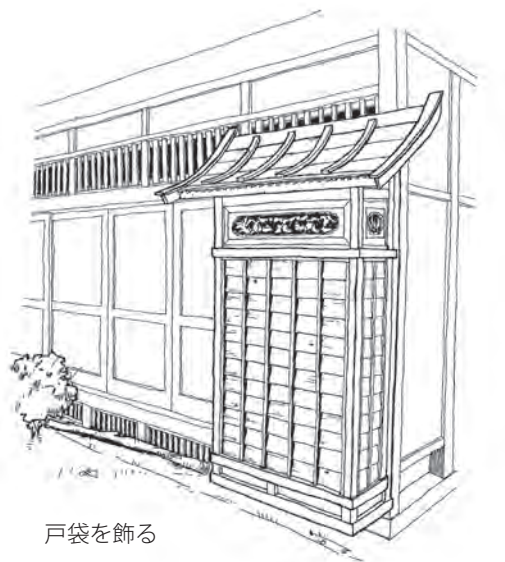


2階建ての民家

すこのリズム感はない。また、すべての屋根の軒裏をセガイ造りで飾ることによって、軒の出がより深くなり、建物の陰影が深まり、立体感を増す効果が生まれている。妻側の破風の部分も入母屋造りの屋根を掛けることによって、妻壁が破風から一段引っ込み、ここにも陰影が生まれる。気仙大工が手がけた建物はこのように屋根を入念に仕上げた建物が多いことも特徴の一つと言える。

● 戸袋を豪華に飾る ●

現在多く使われているアルミサッシの窓では、雨戸は特に立てないこともあるし、立てても戸袋を



戸袋を飾る

作らないことが多い。雨戸の代わりにシャッターを使うこともある。その場合は防犯、防火の意味が大きい。かつての家屋の縁側と外部との境には、いつもは建具を立てず、夜間の戸締り用と雨の日だけ雨戸を立てることが多かった。その雨戸は普段は縁先の両端か一方の端に戸袋という収納箱を作って入れていた。戸袋は実用的には雨戸を収納するだけの意味しかないが、気仙大工はここに技能を發揮することを好んだようだ。戸袋の正面、測面の壁は「ささら子下見板張り」という手の込んだ細工をし、その上の小壁の部分には気仙大工の得意とする彫刻を施し、さらに屋根は重タルキ（間隔の狭い垂木）に板葺きの七五三庇という、これ以上はないという繊細な技で作りを上げていく。それはまるで家屋の一部というより工芸の域に達している。1ヶ所あるだけでも見ごたえがあるのに、気仙大工が建てた家では同じ作りの戸袋が一軒に3ヶ所もあった。



いのり  
祭り行事と信仰

1 碁石の祭りと芸能

● 中森熊野神社の式年大祭（五年祭） ●

中森熊野神社の大祭は、かつて2年に一度行われていたが、昭和43年（1968）の開催から4年に一度の式年となり、数え年で「五年祭」と呼ばれている。祭日は旧暦9月14日で、これは熊野神社の創建縁起で、麻腐島に着いた熊野権現の神輿を当地に勧請した日である。現在は泊里の八幡神社の神輿もともに渡御するが、これは戦後、八幡神社じたいの祭礼が行われなくなってからのことだという。

熊野神社を出た神輿が行列を従えて浜の御旅所に渡御し、祭典の後に熊野神社に還御する。東日本の沿岸部に多く見られる浜出の御旅所祭礼であるが、中森熊野神社の祭礼の特徴は、その渡御行列に氏子

である碁石5地区と中央地区（門之浜・中井・梅神・小河原）の9部落が8組に編成され（門之浜と中井が合同で門中組を構成する）、それぞれ芸能を奉納することと、熊野権現の漂着地とされる麻腐島をめぐる曳舟による海上渡御が行われることである。三陸沿岸の御旅所祭礼には、どちらもよく見られる特徴である。

奉納される芸能の代表的なものは虎舞で、基本的にすべての組が奉納する。その虎舞が青年男性中心

であるのに対し、女性は手踊りを演じる。その年ごとに先生を頼んで振り付けられる手踊りは、祭り組の女性やその親族の多くが参加し、習得するのに一ヶ月近く稽古を重ねる組もあったという。これに加えて、西館、碁石では七福神の舞を奉納する。海上渡御の御召船は、かつては地区内の船主が所有する大型漁船（サンマ船）の中からくじ引きで選ばれていた。とくに熊野神社の神輿を乗せる御召船に選ばれるのはたいへんな名誉であったという。御召船以外にも、猿田彦や梵天を乗せる船や、警護船などが出るが、これらはすべて地元の漁業者が所有する船である。以前は浜から小型の舢舨を出し、各祭り組の虎舞を海上で披露することもあった。

平成24年の五年祭では、大船渡漁協が所有する定置網船「第一大浜丸」（八幡神社）と「第八大浜丸」（熊野神社）が御召船を務めた。第一大浜丸は大船渡市漁協所有の定置網船のうち、津波で唯一流失しなかった船体を修理して復活したもの、また第八大浜丸は震災後の9月に漁業の復興を願って新造されたばかりの船であった。この年の祭礼では門之浜港に御旅所が設けられたので、麻腐島の周辺を回っただけであったが、泊里港から曳舟が出ていたときは、碁石岬の先まで御召船が巡幸した。海上渡御の前には、麻腐島に松と竹の枝が一本ずつ立てられる。今回の津波でも、4年前に立てられた枝の根元は残っていたという。

この大規模な祭礼を支えた一つの要因は、地区の船主たちの経済的な後ろ盾であった。氏子である碁石地区、中央地区はもちろん、より大型船の出入り

平成4年（1992）10月の熊野神社式年大祭。虎を乗せた曳船が麻腐島を目指す（川島秀一氏提供）



の多かった細浦地区の船主たちも、神社及び各祭り組に多額の寄付をしていたという。昭和40年代に祭りが4年に一度に変更されたのは、昭和32年に開発されたというワカメ養殖が主流になり、漁船漁業が縮小していったことと関係があるのではないか。また、かつては祭りのときには特別にアワビを採って祭り組の資金にしていたというが、近年は漁協の規制が厳しくなり、ノシ代わりに少量、許可を得て採っているだけという。

● 虎舞と采棒振り ●

なぜ、すべての祭り組が虎舞を奉納するほど、当地では虎舞が盛んなのか、そこには二つの素地が考えられる。

一つは、熊野修験が広めた権現舞である。中森熊野神社が熊野の修験が仕えた神社であることは、別に述べたとおりである。東北地方に広まった山伏あるいは法印といった修験者たちは、獅子頭を神の仮の姿（権現とは「仮に現れる」の意味）とし、その舞を奉じることで、災いを除け、願いを叶える祈禱を果たすと説いた。有名な早池峰神楽や黒森神楽でも、最重要とされるのは権現舞であり、三陸地方の広い範囲で春に権現さまが悪魔払いに訪れるのも、この信仰が基盤にあるからである。

もう一つは、虎舞が三陸の沿岸部に濃密に分布していることから、海の生活と深く関わることが考えられる。虎舞の全国的な分布をみると、神奈川や静岡、鹿児島などにも見られるが、圧倒的に数が多いのは三陸地方で、それも内陸部にはわずかしかなかく、

対して沿岸部では気仙沼市、大船渡市、三陸町、釜石市、大槌町などに、ほとんど部落ごとにあるというほど多い。

虎舞には「虎は千里往って千里還る」という故事がしばしば付随する。「板子一枚下は地獄」と例えられる危険な海上での仕事から無事帰るといふ、海上安全の祈りが込められているのである。気仙沼市の浪板や松園の虎舞では、消息を絶った船を案ずる人々が、虎斑の猫が通り過ぎるのを見かけたところ、その船が帰還したという伝説があり、それを虎舞の由来としている。

これらを考え合わせると、碓石地区の虎舞は、熊野修験が広めた権現舞の伝統に、漁民が海上安全の願いを託して、権現（獅子）を虎に見立てたものと理解することができるだろう。

碓石地区でも小正月（今は元旦か2日に行われることが多い）には悪魔払いが回ってくる。実際には虎舞が回ってくるのであり、縁側から家へ上がって、神棚の前で虎舞を演じ、そのまま玄関から出て行くという。よそであれば権現さまが来るところを、虎舞がその役を務めている。その虎舞も、気仙沼市などでは頭から虎の姿形になっているが、碓石の虎舞の頭は明らかに獅子頭である。要するにここでは、権現さまと虎舞は別のものでないのだから。

ところで虎舞には、采棒振り（シャブッコフリ）がつきものである。今は小さな子どもたちが演じていることが多いので、おまけの役のように見られるかもしれないが、権現舞や獅子舞には欠かせない役である。獅子舞には古くから、鼻取りや獅子使いなどと呼ば

大船渡市、陸前高田市、気仙沼市の3市内にある。その多くが、明治以降に近隣から習ってきたものと伝えている。例えば陸前高田市小友町門前の七福神舞は、西館から昭和9年頃伝えたという。通婚・移住を含めた港町どうしの交流がこの芸能を広めたことがよくわかる。これらは共通する様式をもち、とくに「ミツサイナ、ミツサイナ」という囃子詞や、

数え歌形式の詞章などに特徴がよく表れている。この七福神舞のルーツをたどると、大黒舞に行き当たる。数え歌形式の歌を歌いながら大黒（ときに恵比須と連れ立つ）に扮して踊る大黒舞は、室町時代の中期ごろから流行していた。声聞師や千秋萬歳などの芸能民が伝え、やがて大黒舞を専門に演じる者も現れたことが、『嬉遊笑覧』などの江戸時代の風俗書にも描かれている。三陸とほとんど同じ「見っさいな、見っさいな、大黒舞を見っさいな」という

囃子詞が、山陰や九州にも伝わっていることから、この舞が近世に大いに流行したことがわかる。萬歳などと同じく、正月に門付けをして回る祝福芸の一種である。

碓石地区でも、泊里の祭り組が一時期、大黒舞を出していた。別に紹介した泊里の祭礼記録（次頁）には昭和31年のみ記録に残るが、昭和20年代にも出していたようである。もと泊里の浜守正一さん（昭和7年生まれ）はその経験者の一人で、今も歌を記憶している。大黒舞とはいえ、実際は恵比須と大黒の2種の舞を、それぞれ2名ずつで演じたという。歌は西館や碓石の七福神の、恵比須、大黒それぞれの歌とほぼ同じである。

ただ、この大黒舞を碓石地区の七福神の古い姿と考えるのは難しい。泊里に大黒舞を持ち込んだのは、この舞の師匠であった村上長四郎さんだという。賑

れる、獅子を操る役がセットになっている。この役を宇天王などと呼んで、獅子以上の霊力をもつ存在と見なすこともある。虎舞の采棒振りも、これに連なる存在と考えられる。采棒振りの子どもたちは、屋号や個人名を意匠化した文様を刺しゅうした前掛けを着けている。こうした衣裳は各家で用意するという。

● 七福神と大黒舞 ●

七福神は、いまは西館と碓石に伝わっている。現在の子供七福神として知られるが、必ずしも古くから子どもの芸だったわけではなく、以前は若い衆が演じるものだった。だから歌の文句や舞のしぐさには、子どもには理解しがたいであろう性的な滑稽も入り、アドリブでそうした振りを入れ込む（道化が入る）という）のが本来の姿だったとも言われる。

三陸沿岸には、虎舞同様、七福神舞の伝承も多い。とくに三陸全体に現存する七福神舞の半数以上が、

やかなことが好きだったという長四郎さんは、すでに七福神を演じていた西館や碓石に負けぬよう、どこから恵比須と大黒の舞を習ってきたのだという。将来的には他の福神を加えて七福神にすることを考えていたのかもしれないが、残念ながら泊里ではこれが根付くことはなく、長四郎さんが手を引くと、そのまま演じられなくなってしまったようである。

ところで、一般的には七福神というと、大黒天・恵比須・毘沙門天・弁財天・布袋・福祿寿・寿老人の7人の福神を指すが、西館と碓石の七福神にはなぜか布袋さまが登場せず、かわって最初と最後にどちらが大黒天が登場する。これは大船渡市の平七福神や、陸前高田市の長部湊七福神なども同様で、こんなことから、これらの七福神が同じ系譜にあることがわかるのである。



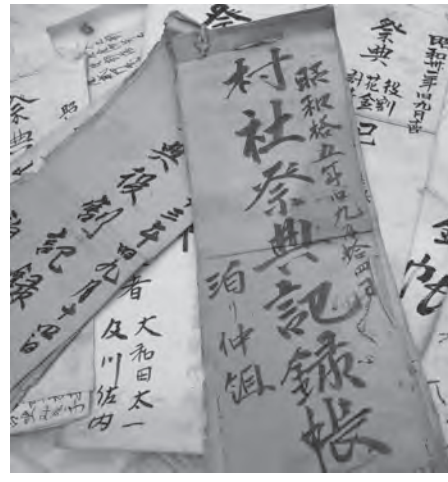
山根組の小虎舞の頭

1. 熊野神社の神輿と御六尺が乗ったお召船 (H24年大祭)
2. 三十刈組の虎舞とサイボウ振りの子どもたち (H24年大祭)
3. 碓石組の七福神舞 (H24年大祭)
4. 西館組の七福神の子どもたち (昭和37年大祭、武田貞一氏提供)



2 泊里の祭礼記録文書から

泊里部落には、地域の決めごとや共有財産、出納などに関わる様々な文書が残されている。最も古いものは大正8（1919）年のものであるが、主として昭和初期からの記録である。その中に、中森熊野神社祭礼に関するものも多く含まれている。年によって記録の内容は異なるが、基本的には役割帳と出納簿である。ここにはその役割帳に従って、各年の祭礼への参加者名を掲出した。記録のいくつかは津波に浸かって判読不能になっており、また記録の一部が失われているもの、部分的に判読が困難なものがある。判読不能な文字は●で示した。また年によって人名の表記に食い違いがあるので、同一人物と思われる場合には、妥当と思われる表記に統一した。ただし完全な正確を期するのは難しいことをご了解いただきたい。



泊里の祭礼記録文書

年月日	御陸尺旗・纏	虎舞	太鼓・笛	采棒振大黒舞ほか	手踊り	その他
昭31年 (1956) 旧9月14日	【代表】 熊谷正雄 山本徳一 【纏】 村上勝三郎	【虎舞】 熊谷吉右エ門 大和田庄之進 大和田福一 大和田治雄 村上淳夫 村上満津夫 大和田正男 村上希夫	【太鼓】 熊谷芳雄 鎌田吉夫 【笛】 大和田吉雄 大和田太一 大和田元一 菅野昭雄	【大黒先生】 村上長四郎 【大黒踊】 大和田統一 村上雄一 及川政行 及川利夫	【踊先生】 村上まる子、大和田忠雄 【手踊（大）】 村上芳子、大和田トクエ、大和田良子、古座道子、熊谷勝子、村上茂子、鎌田清子、村上洋子、古座良子、鈴木勝子、大和田タツ子 【手踊（中）】 山本登久子、武田弘子、古座紀子、村上絹子、大和田キヨヘ、大和田豊子、熊谷幸子、金子富喜美、熊谷恵美子、村上時子、村上国子、古座カヨ子 【手踊（小）】 大和田洋子、古座幹子、熊谷敦子、及川喜久代、大和田道子、種田瑠璃子、大和田慶子	【三味線】 大和田富治郎
昭33年 (1958) 旧9月14日	【代表】 熊谷吉右エ門 大和田庄之進 【纏】 村上金治郎	【虎舞】 及川佐内 大和田福一 熊谷友矩 浜守正一 大和田治雄 大和田忠	【太鼓】 山本徳一 熊谷芳雄 鎌田吉夫 【笛】 大和田元一 村上啓二 熊谷勝雄	【采棒振】 及川達雄 熊谷正勝 大和田安夫 金子一男 鎌田文雄 菅原正雄 大和田清一	【責任者】 大和田忠雄 【助手】 村上洋子 【手踊大組】 細川洋子、武田弘子、大和田豊子、熊谷悦子、古座徳子、山本登久子、鈴木勝子、大和田タツ子、大和田友男、大和田正男 【手踊中組】 村上国子、村上時子、古座幹子、熊谷敦子、大和田洋子、古座カヨ子、菅野和枝 【手踊小組】 大和田道子、種田瑠璃子、志田加代子、大和田恵子、鎌田たか子、大和田勝江、及川里子、山本良子	
昭35年 (1960) 旧9月14日	【代表】 熊谷吉右エ門 大和田庄之進 【纏】 後藤福治	【虎舞】 及川佐内 大和田福一 大和田治雄 村上希夫 熊谷友矩 村上満津夫	【太鼓】 熊谷芳雄 古座義友 【笛】 大和田吉雄 大和田太一 大和田元一		【先生】 大和田忠雄、大和田正男、細川洋子 【女手踊】 武田弘子、大和田豊子、山本登久子、菅野和枝、古座幹子、古座カヨ子、村上時子、大和田洋子、大和田道子、山本良子、志田加代子、大和田恵子、鎌田たか子、及川里子、大和田かつえ、大和田かつ子、大和田かつ子、大和田千代子、鎌田よし子、山本美奈子、大和田サツ子、及川伊佐子、熊上悦子、菅原久子、種田たつ子 【男手踊】 大和田勝雄、大和田精治、鎌田文雄、大和田安雄、金子一雄、熊谷夏夫、熊谷芳秋、村上文雄、及川達雄、熊谷新助、菅原正雄	
昭37年 (1962) 旧9月14日	【代表】 大和田太一 及川佐内 【纏】 志田正雄	【虎舞先生】 熊谷友矩 【虎舞】 大和田福一 浜守正一 村上希夫 村上満津夫	【太鼓】 熊谷芳雄 古座義友 【笛】 大和田吉雄 大和田忠 村上啓二		【先生】 大和田正男、村上国子、大和田豊子 【女手踊】 大和田洋子、熊谷さつ子、古座幹子、古座カヨ子、大和田道子、種田瑠璃子、大和田恵子、山本良子、志田加代子、鎌田たか子、大和田かつ子、大和田千代子、大和田かつえ、及川里子、山本美奈子、鎌田よし子、大和田かつ子、大和田サツ子、及川伊佐子、熊上悦子、菅原久子、熊谷未加子、鎌田やつ子、種田たつ子 【男手踊】 及川国男、菅原正雄、熊谷新助、熊谷芳秋、村上文男、志田正弘、村上勝弘、後藤善太郎、熊谷秀雄	
昭39年 (1964) 旧9月14日	【代表】 大和田太一 及川佐内 【御陸尺】 熊谷正雄 古座義友 【旗】 武田洋一 【纏】 熊谷哲二	【虎舞先生】 熊谷友矩 【虎舞】 大和田福一 浜守正一 村上希夫 大和田治雄 村上満津夫	【太鼓】 熊谷芳雄 村上金治郎 【笛】 大和田吉雄 大和田元一 村上啓二	【電蓄】 種田捷記 菅野昭雄	【先生】 大和田正男、大和田忠雄、村上国子 【女手踊】 古座幹子、藤田その子、大和田かつ子、大和田恵子、大和田千代子、大和田かつえ、及川里子、山本美奈子、鎌田たか子、志田加代子 【小】 大和田久子、大和田サツ子、及川伊佐子、熊上悦子、菅原久子、鎌田よし子、鎌田やつ子、熊谷未加子、熊谷和賀子、種田たつ子、後藤福代、大和田かつ子、加川恵津子 【男手踊】 及川昇、及川国男、及川昭男、山本敏彦、菅原正雄、熊谷新助、菅野健男、熊谷秀雄、熊谷昭雄、志田正弘、後藤善太郎、村上勝弘、村上弘之	
昭43年 (1968) 旧9月14日	【代表】 大和田忠雄 菅原正一 【御陸尺】 村上大三郎 村上長四郎 熊谷嵩 【旗】 武田洋一 【纏】 加川秀雄	【虎舞先生】 熊谷友矩 【虎舞】 大和田福一 浜守正一 大和田治雄 村上満津夫	【太鼓】 熊谷芳雄 菅野昭雄 【笛】 大和田元一 大和田治雄 大和田忠	【電蓄】 種田捷記 古座義友	【先生】 大和田正男 【助手】 大和田かつえ 【女手踊】 志田加代子、種田瑠璃子、及川伊佐子、大和田サツ子、熊上悦子、菅原久子、鎌田やつ子 【女手踊小】 熊谷未加子、熊上たつ子、大和田久子、熊谷和加子、後藤福代、加川恵津子、村上秀子、古座恵子、熊上千恵子、大和田ヒロミ、浜守秀子、千葉由美、村上睦子、加川成子、加川貞子、熊上良子、古座幸子、村上静子、村上春恵、大和田明美、浜守徳子 【男手踊】 山本年春、及川昇、村上弘之、熊谷昭雄、熊谷道広、大和田忠弘、熊谷友芳、古座清人、大和田文哉、古座博夫、後藤智也志、大和田秀夫、熊谷文雄	

年月日	御陸尺旗・纏	虎舞	太鼓・笛	采棒振大黒舞ほか	手踊り	その他
昭15年 (1940) 旧9月14日	【纏】 熊上八百治	【虎舞】 熊上八百造 熊谷吉右エ門 大和田庄之進 及川佐内	【太鼓】 及川秀雄 村上基助 及川定之進 【笛】 大和田元一 大和田吉雄		【女手踊】 熊上ヤヲノ、熊谷和子、大和田アヘ子、大和田アサ子、村上クラヘ、大和田トミ子、古座ヤス子、村上ミチ子、村上栄子、大和田モト子、大和田マツエ、村上ナツヨ、村上キンヨ、熊谷セツ子、村上シズ子、金ミチ子、古座チエ子、大和田オモ子 【男手踊】 大和田太治馬、大和田太治雄、及川健三、熊谷悦雄、村上松治郎、熊谷芳雄	
昭17年	(役割記載無し)					
昭19年 (1944)	【御陸尺】 大和田福十郎 熊谷音吉 【纏】 大和田良助	【虎舞】 村上長四郎 熊上八百治	【太鼓】 山本徳一 及川健三 熊谷市男			
昭21年 旧9月14日	(この年は祭礼中止、記録に以下の説明あり) 旧九月十四日ノ夜若衆御参り並ニ悪魔ハラエ 此ノ年ハ赤痢患者 村内二十人モ発生シタタメニ 十一月十四日祭典寛書迄。					
昭23年 (1948) 旧9月14日	【纏】 鈴木卯之助	【虎舞】 及川佐内 大和田福一 浜守正一 村上松治郎 大和田治雄 大和田良一	【太鼓】 村上勇治 熊谷芳雄 大和田太治馬 【笛】 大和田太一 大和田太治雄		【踊先生】 大和田忠雄、大和田アサ子、大和田トミ子 【大女踊】 大和田モト子、大和田オモ子、村上キンヨ、熊谷セチ子、古座チエ子、村上シズ子 【中女踊】 大和田トクエ、大和田ハチエ、金ユキ子、村上マリ子、村上ヨシ子、熊谷トモ子、熊上キミ子、古座サチ子、熊谷シミ子、熊谷タカ子 【小女踊】 大和田シゲ子、大和田マサ子、大和田ヨシ子、金子カエ子、尾崎ノブ子、村上ヨシ子、鈴木勝子、大和田辰子（達子）、山本登久子、古座道子、熊上ヨシ子、古座オリ子、熊谷カツ子、熊谷エツ子、鎌田キヨ子、村上シゲ子、武田ヒロ子、●●洋子 【男手踊】 大和田政男、大和田友男、村上満津夫、古座弘、村上暁男、金良克、種田捷記	【三味線】 大和田富治郎
昭25・27年	(資料の損傷激しく 閲覧不可)					
昭29年 (1954) 旧9月14日	【代表】 熊谷正雄 山本徳一 【纏】 村上勝三郎	【虎舞】 熊上八百治 熊谷吉右エ門 大和田庄之進 大和田福一 大和田治雄 大和田正男	【太鼓】 山本徳一 熊谷芳雄 菅野昭雄 【笛】 大和田吉雄 大和田太一 大和田元一 大和田忠雄 村上満津夫	【采棒振】 熊谷芳弘 村上雄一 及川政行		



年月日	御陸尺旗・纏	虎舞	太鼓・笛	采棒振大黒舞ほか	手踊り	その他	
平元年 (1989) 10月15日	「昭和六十三年十月奉祀予定の祭が昭和天皇の御病氣平癒祈願の為中止になり、平成元年十月十五日(日)天気快晴の絶好のお祭日和の中に繰りひろげられ近郷近在より多くの観衆が集まった。(中略)各組共夫々山車の新調、改良等で一段と賑わいを増した祭典であった。泊里組でも山車を新調した」との記録あり。	【代表】 熊上勝利 大和田忠 【御陸尺】 浜守正一 小松基 村上忠一 千葉哲郎 【旗】 大和田正男 【纏】 武田和明	【虎舞】 大和田治雄 村上希夫 大和田清一 熊谷秀雄 及川昇 熊谷昭雄 【子供虎舞】 大和田真也 及川広樹 村上勝春 大和田享志 熊谷正也	【太鼓】 鎌田吉夫 及川政行 菅原正雄 【子供太鼓】 山本淳一 大和田祖裕 及川哲也 熊谷賢一 【笛】 村上満津夫 村上淳夫 熊谷克夫 村上千春 古座清人 【子供笛】 大和田進	【采棒振】 山本司 千葉浩介 熊上雅俊 戸羽優貴 【電蓄】 種田捷記 熊谷新助 村上勝弘 【屋台】 熊谷克夫 熊谷睦雄	【先生】 渡辺光子 (小友三日市) 【世話人】 古座安子、熊谷キヨシ、村上栄子、熊上ナツ、浜守トモ子、千葉アイ子 【女手踊】 大和田トシ子、大和田カツ子、村上年子、大和田清子、村上シゲ子、鎌田トミ子、吉田京子、村上カヨ子、大和田洋子、種田健子、大和田豊子、熊上璋子、及川則子、熊谷喜恵子、熊上悦子、熊谷正子、菅原多美子、熊谷悦子、熊谷君子、村上富士子、熊谷美代子、大和田秋子、戸羽サツ子、山本カツ子、及川加代子、熊谷るみ子、古座郁代、後藤寿子、大和田真理子、大和田豊子、武田礼子、熊谷優子、村上順子、熊谷弘子 【中学生】 大和田美紀、及川久美子、菅原千恵子、熊谷純子、菅野美幸 【小学生】 大和田ミカ、熊谷良子、菅原里沙子、熊谷友美、熊谷真紀、熊上友紀、熊谷尚美、熊谷千賀子 【保育園児】 山本めぐみ、後藤莉奈、戸羽麗香、熊谷智恵、熊谷あゆみ、村上佐代里、熊谷良子、菅原理沙子	【消防団】 大和田忠弘
平4年 (1992) 10月25日	【御陸尺】 及川広司 菅原正一 大和田太一 山本徳一	(以下役割記録無し)					
平8年 (1996) 10月20日	【代表】 古座義友 小松基 【御陸尺】 種田捷記 村上勝弘 古座清人 大和田典明 【旗】 後藤善太郎 【纏】 鎌田久也	【顧問】 熊谷友矩 【虎舞】 熊谷秀雄 熊谷芳弘 及川昇 熊谷昭雄 大和田達也 吉田光洋 大和田真也 村上勝春 千葉浩介 熊上雅俊	【太鼓】 鎌田吉夫 及川政行 菅原正雄 大和田秀雄 熊谷貢 【笛】 村上満津夫 村上淳夫 大和田忠 熊谷克夫 村上千春 村上満 熊上和弘	【采棒振】 浜守正一 戸羽優貴 村上勝栄 後藤翔太 古座世士明 【電蓄】 大和田清一 熊谷新助 【屋台】 熊上勝利 熊谷克夫 熊谷睦雄 戸羽一彦	【踊先生】 村上年子 【踊相談役】 浜守トモ子、熊上ナツ、大和田カツ子、熊上璋子 【踊世話係】 浜守トモ子、熊上ナツ、熊谷忠子、千葉アイ子、村上シゲ子、大和田トシ子、大和田カツ子、大和田良子、菅野啓子、及川則子 【女手踊】 大和田洋子、熊谷るみ子、吉田京子、鎌田トミ子、村上カヨ子、村上美智子、大和田豊子、山本カツ子、及川加代子、大和田秋子、熊谷美代子、菅原多美子、村上富士子、熊谷正子、熊谷君子、後藤寿子、熊谷喜恵子、古座郁代、戸羽サツ子、熊上悦子、村上静子、小松典子、大和田真理子、及川久美子、種田千里、菅原千恵子、熊谷優子、熊上照美、熊上友紀、菅原里沙子、熊谷尚美、熊谷純子、大和田美紀、熊谷友美、熊谷真紀、熊谷智恵、熊谷あゆみ、山本めぐみ、戸羽麗香、後藤莉奈、村上佐代里、村上未奈美、古座明日香、熊谷美智子、村上優香里、大和田倫代、後藤愛香	【化粧・着付】 フランセ美容室 【受付】 大和田太一 後藤福治 熊谷芳雄 古座庄太郎 熊谷哲二 千葉哲郎 村上満津夫 村上淳夫 熊上勝利 大和田忠	【化粧・着付】 大和田忠弘 【受付】 大和田太一 及川政男 熊谷吉右工門 菅原正一 金東晃 浜守正一 熊谷芳雄 熊谷友矩 熊上宏 熊谷哲二



◀大祭の折の泊里組の写真(昭和後期～平成にかけて)。波をかぶったアルバムから集められた(熊谷芳弘氏提供)。一番右は泊里組の虎舞と子供虎舞の頭。津波にさらわれたが、後日瓦礫の中から見つかった。泊里組の解散により、虎舞も舞われることがなくなった。

年月日	御陸尺旗・纏	虎舞	太鼓・笛	采棒振大黒舞ほか	手踊り	その他
昭47年 (1972) 10月23日	【代表】 浜守正一 古座義友 【御陸尺】 村上金治郎 鎌田喜助 大和田吉雄 【旗】 武田洋一 【纏】 吉田勇	【虎舞先生】 熊谷友矩 【虎舞】 村上希夫 大和田治雄 熊上勝利 大和田清一	【太鼓】 熊谷秀雄 及川政行 熊谷芳弘 【笛】 村上満津夫 大和田忠 大和田元一	【電蓄調整員】 小松基 【電蓄】 種田捷記 村上雄一 加川秀雄 熊谷哲二 尾崎哲二郎 後藤福治 浜守修助	【先生】 藤井政子 (広田) 【助手】 大和田勝江 【女手踊】 大和田かづ子、及川里子、加川恵津子、熊上悦子、鎌田ヤチ子、熊谷未加子、種田たち子、千葉由美、熊谷ユカ子、古座恵子、村上睦子、村上秀子、熊谷千枝子、大和田ヒロミ、浜守秀子、加川貞子、加川成子、古座幸子、村上静子、浜守徳子、村上春恵、大和田トヨ子、古座恵美子、熊上良子、大和田真理子、千葉真紀子、村上美香、種田三千代、武田和子、小松典子、村上久美子 【男手踊】 後藤智也志、大和田秀夫、浜守文男、熊谷文雄、大和田茂男、熊谷貢、浜守政信、古座博文	
昭52年 (1977) 10月16日 ※この年の記録は全体に損傷激しく判読困難	【代表】 熊谷友矩 種田捷記 【御陸尺】 古座庄太郎 大和田忠 熊谷秀雄 及川昇 【旗】 武田洋一 【纏】 刈谷成男	【虎舞】 村上希夫 大和田治雄 浜守正一 熊上勝利 大和田清一 武田和明 熊谷芳弘 村上勝弘 熊谷睦夫 熊谷新助 熊谷昭夫	【太鼓】 熊谷芳雄 古座義友 鎌田吉夫 及川政行 菅原正雄 【笛】 村上満津夫 大和田忠 村上淳夫 村上敏雄	【電蓄調整員】 小松基 【電蓄】 加川秀雄 熊谷哲二 畠山孝吉	【先生】 吉田敏子、村上淑● 【世話人】 古座安子、村上栄子、加川トミ子 【女手踊】 大和田トシ子、浜守トモ子、村上●子、千葉アイ子、加川成子、大和田●子、熊谷●子、種田健子、熊上多津子、武田弘子、熊谷●子、熊谷●●、大和田トシ子、大和田ヒロミ、浜守●子、村上年子、千葉真紀子、加川貞子、加川成子、熊上良子、古座幸子、村上静子、村上春恵、大和田豊子、大和田千春、大和田真理子、千葉真由美、村上美香、鎌田久美、尾崎真理、熊谷京子、畠山明美、種田三千代、種田千里、武田和子、古座恵美子、熊谷理砂子、小松典子、村上久美子、大和田いづみ、熊谷優子、菅野リカ 【男手踊】 浜守政信、大和田茂夫、村上満、村上寛人、大和田一、畠山秀樹、熊上和弘、小松淳	【化粧・着付】 千葉ユキ子
昭55年 (1980) 10月19日	【代表】 大和田友男 村上満津夫 【御陸尺】 大和田清一 尾崎哲二郎 後藤福治 村上福寿 【旗】 武田洋一 【纏】 大和田芳栄	【虎舞】 村上希夫 熊上勝利 武田和明 熊谷芳弘 村上勝弘 熊谷秀雄 熊谷昭雄 及川昇 【子供虎舞】 村上寛人 大和田一 熊上和弘	【太鼓】 古座義友 鎌田吉夫 及川政行 菅原正雄 熊谷文雄 【子供太鼓】 村上満 【笛】 大和田忠 村上淳夫 小松基 熊谷克夫 【子供笛】 小松淳	【采棒振】 尾崎浩樹 大和田達也 熊上正明 大和田庄二 吉田光洋 大和田真也 及川哲也 村上勝春 大和田進 【電蓄】 種田捷記 熊谷睦雄	【世話人】 古座安子、村上栄子、熊谷キヨシ 【女手踊】 浜守トモ子、千葉アイ子、種田健子、大和田トシ子、大和田カツ子、村上シゲ子、吉田京子、大和田清子、鎌田トミ子、村上年子、大和田豊子、武田弘子、村上美智子、大和田秋子、菅原多美子、熊谷正子、熊上千恵子、古座恵子、大和田ヒロミ、村上静子、古座恵美子、村上美香、村上久美子、大和田真理子、小松典子、熊谷理砂子、武田和子、種田千里、千葉真由美、尾崎真理、熊谷京子、大和田千春、鎌田久美、大和田いづみ、熊谷優子、武田礼子、大和田裕子、熊谷弘子、村上順子、尾崎ひろみ、大和田美紀、熊谷みゆき、及川久美子、菅原千恵子	【消防団】 大和田忠弘 【受付】 大和田太一 及川政男 熊谷吉右工門 菅原正一 金東晃 浜守正一 熊谷芳雄 熊谷友矩 熊上宏 熊谷哲二
昭59年 (1984) 10月7日	【代表】 鎌田吉夫 村上希夫 【御陸尺】 熊谷哲二 熊上勝利 熊谷芳弘 熊谷新助 【旗】 武田洋一 【纏】 小松基	【虎舞先生】 熊谷友矩 【虎舞】 大和田治雄 大和田清一 熊谷秀雄 及川昇 【子供虎舞】 熊上和弘 尾崎浩樹 熊上正明 大和田真也 大和田達也 及川哲也 大和田進	【太鼓】 熊谷芳雄 及川政行 菅原正雄 【子供太鼓】 大和田庄二 吉田光洋 【笛】 大和田忠 熊谷克夫 村上淳夫 村上満津夫 小松淳	【采棒振】 大和田祖裕 村上勝春 山本淳一 熊谷賢一 大和田隆 熊谷正也 【電蓄】 種田捷記 熊谷睦雄 【屋台】 後藤福治 村上福寿 尾崎哲二郎 武田和明	【先生】 渡辺光子 (小友三日市) 【世話人】 古座安子、村上栄子、大和田マツエ 【女手踊】 浜守トモ子、千葉アイ子、大和田トシ子、大和田カツ子、大和田清子、村上シゲ子、鎌田トミ子、武田弘子、吉田京子、村上カヨ子、村上美智子、村上年子、大和田洋子、大和田豊子、熊上璋子、及川則子、熊谷悦子、大和田サツ子、熊谷美代子、熊谷喜恵子、熊谷正子、菅原多美子、熊上悦子、熊谷君子、村上富士子、村上静子、古座幸子、村上春恵、千葉マキ、千葉真由美、尾崎真理、熊谷京子、種田千里、大和田千春、鎌田久美、大和田いづみ、武田礼子、熊谷優子、大和田裕子、熊谷弘子、村上順子、尾崎ひろみ、大和田美紀、及川久美子、菅野美幸、菅原千恵子、熊谷純子、大和田ミカ、熊谷良子、菅原里沙子	【消防団】 大和田忠弘 【受付】 山本徳一 熊谷吉右工門 大和田太一 大和田元一 及川政男 金東晃 菅原正一 古座庄太郎 熊上宏 浜守正一 古座義友 大和田友男



## ① 中森熊野神社

泊里の浜を見渡す高台に鎮座する、末崎町の中央地区（梅神、小河原、門之浜、中井）と碁石5地区（西館、山根、泊里、碁石、三十刈）の9部落を氏子域とする旧村社である（写真1）。創建年代は不明だが、気仙地方の古社の一つとして知られ、その縁起は、宝暦11（1761）年に高田町の相原友直が著した『気仙風土草』や、明和9（1772）年に完成した仙台藩編さん・田辺希文著の地誌『封内風土記』にも述べられており、今から250年以上も前にすでに知られていた。『封内風土記』の縁起の内容は次のとおりである。

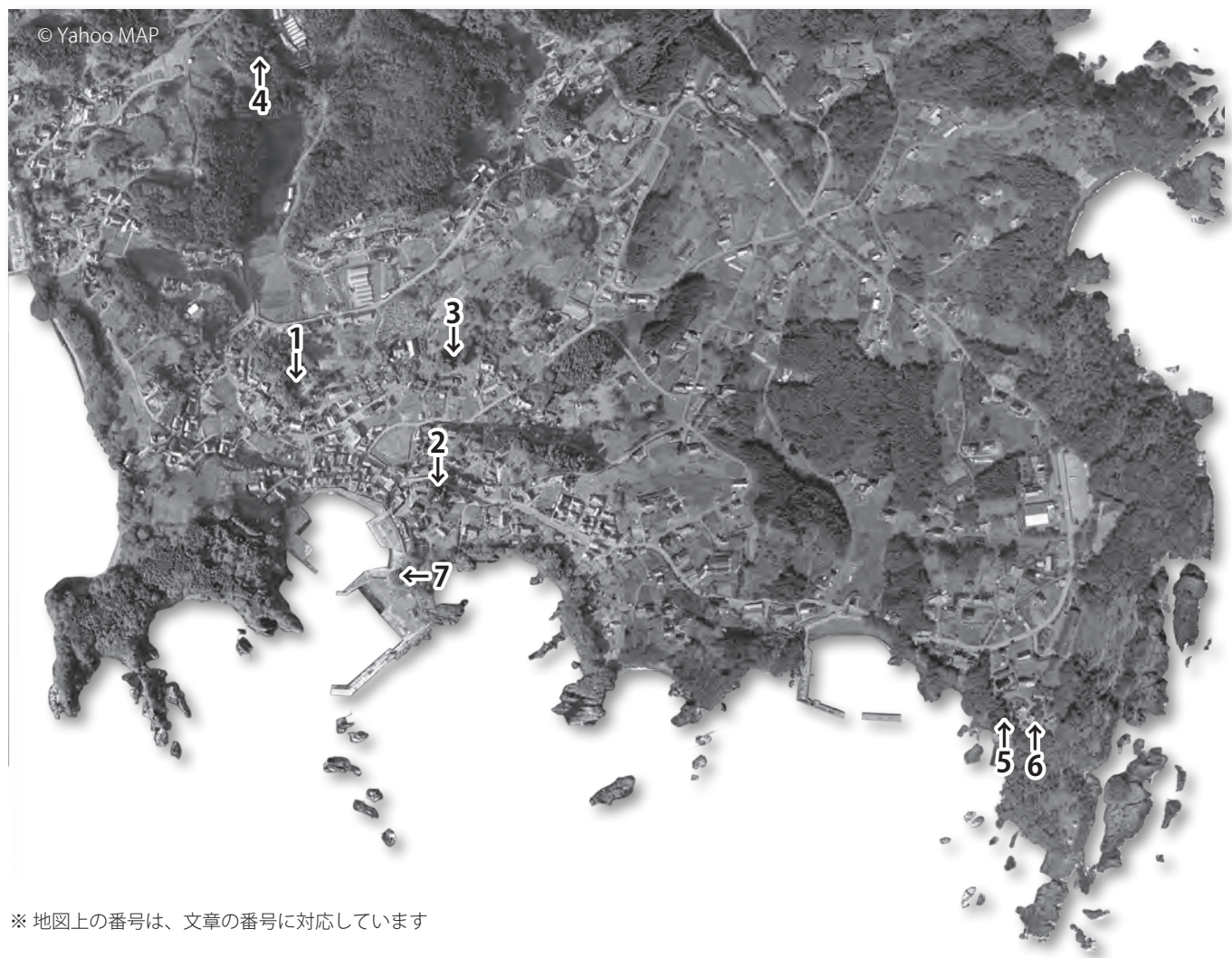
その昔、泊里濱に漂着した船があった。船の中には神輿と祭器、楽器、狛犬、瓶子、釜、舞獅子等があった。太鼓の胴の中には神亀の年号（724〜729年）があり、最も古いものである。9月14日にこの地に勧請されたため、毎年この日を祭日とする。疑うらくは宮城郡松島の熊野の神輿であるまいか。かつて松島の円福寺は天台宗であったが、鎌倉最明寺の北条時頼入道がこれを廃し臨済宗とした。これに一山の衆徒は大いに怒り、福浦島に壇を築き、熊野権現に祈ってこれを詛った。これ調伏壇といって今も存在する。そして三社神輿、祭器等を船に積んで流した。おそらくその船がこの



この縁起が記録された最も古い記録は今のところ、渡辺兼雄氏が紹介した、中森熊野神社に残る享保18（1733）年再建の際の寄進者を記録した奉加帳であろう。そこには島に漂着した船から奏でられる管絃の調べに誘われて、浦人が三社権現の船を発見したこと、その際「ここに泊まらん」という神託のあったことから泊里の地名がついた等の伝説が記されている（渡辺兼雄『熊野神社文書を繙く』『郷土誌探訪 気仙つれづれ』所収）。

社宝として市の文化財指定を受けている（大船渡市立博物館『熊野神社の来歴と文化財』）。  
当社の管理には代々、修験者が別当として仕えてきた。別当の屋敷はワンボウ（上坊）と呼ばれ、明治以降はワンボウの志田家の当主が宮司として仕えている。現在の志田隆人宮司は45代目という。『末崎村誌』に載る文化15（1818）年書き上げの歴代別当身分調べによれば、31代から33代までの3代は修験が中絶し俗別当であったが、その当時、法用や祈禱を兼務したのがシタボウ（下坊）家であった。  
現在は、神社の諸用は宮司と地区の役員が協力して務めている。氏子となる9部落からそれぞれ2〜3名の神社役員（総代）が選ばれ、さらにその上に責任役員（総代長、副代表2名、会計）が選ばれる。とくに責任役員は宮司を補佐し、神社の行事を実質的

1. 中森熊野神社 2. 熊野神社のオカザリ 3. 熊野神社の獅子頭（『東北地方の仮面』東北歴史博物館 H12 より転載）



※ 地図上の番号は、文章の番号に対応しています



4. 八幡神社 5. 神明社

に執行する。熊野神社の行事としては、別項に述べた4年に一度の式年大祭の他に、毎年正月、春、秋に「御膳講」と称して例祭を行う。現在は、1月、5月、9月の各14日（実際はそれに近い都合の良い日）にそれぞれ行っている。熊野神社と八幡社に幟を立て、参拝に来た氏子に御膳をふるまったことがその名の由来だという。また年末には役員が集まってオカザリなどの準備をして氏子に配布し、年始には元朝参りの氏子を迎え、どんど焼きをする。熊野神社のオカザリは紅白の和紙を重ね、「開運福祿寿」の文字を切り抜いたもので、どの家でも神棚などに1年間飾り付け、年末に張り替える（写真2）。

## ② 八幡神社

西館のオオヤ、武田家の氏神とされる（写真4）。八幡神社、八幡宮は豊前（大分県）の宇佐八幡宮を総本社とするが、源氏の氏神とされたことから全国に広まり、庶民のあいだでも武神・軍神や農耕神として崇められた。最も古い棟札は享保4（1719）年6月造立のものとされ



るが、創建はそれ以前であろう。当社は『末崎村誌』に「泊里濱彌宜山鎮座」と記されるが、彌宜山は寛永年間の記録に別当家持高とされ、後に紹介する古地図にも熊野宮社地と並んで描かれていることから、古くから別当の管理する村鎮守の性格を認められていたと思われる。

祭礼日は旧暦8月15日で、かつては境内に土俵を設けて角力が行われた。梅神の八幡社でも同じく旧8月十五夜に青年による奉納角力が行われていたらしく、現在の社殿には昭和6（1931）年の角力番付が残されている。

十五夜の相撲については、諏訪大社の十五夜相撲神事や、南九州の十五夜綱引きの後に相撲をとる例など、各地に同様の風習がある。昭和20年代に、部落対抗野球大会の盛り上がりに入れ替わるように、十五夜相撲は行われなくなったという。

### ③ 神明神社

泊里の屋号モトデラの大和田家の氏神である（写真5）。麟祥寺東側から墓地に登る小路の脇の道を入った先にある。現在の社殿は平成に入って大和田家で新築したもので、家氏神としては非常に立派なものである。神明神社とは伊勢神宮を勧請した神社である。泊里の神明神社については、渡辺兼雄氏の「末崎町泊里鎮座神明神社を訪ねて」に詳細に述べられている（『郷土誌探訪 気仙つれづれ』所収）。それによれば当社には13枚の棟札が保存されており、そのうち最も古いものは貞享3（1686）年の年号をもつ。願主は大和田二右衛門、裏に「末崎 本寺」と記さ



6



7



9

れている。モトデラの屋号が言い伝えのとおり、かつて麟祥寺のあった場所であるとするなら、麟祥寺が現在地に移転した時期を知る一つの指標になる。また鱈口には「天照太神宮神前／別当源太／享保十五天十一月吉日」（享保15年＝1730年）と刻まれているという（『末崎の郷土誌』）。

### ④ 大閼稻荷神社

大閼稻荷神社は、泊里湾から北に800ほど離れた、小中井の山の中に建っている（写真6・7）。いまは周囲を杉林に覆われて、地区の人にもその場所はあまり知られていない。この神社は、泊里の屋号モリヤの浜守家の氏神である。現在も浜守家の人々によってよく管理されている。現在の社殿には、大正8（1919）年と昭和30（1955）年の新築の記録が残る

6 大閼稻荷神社  
7 大閼稻荷神社の神像  
8 恵比須様(5)の神像  
9 恵比須様(5)の祠

が、奉納された札には明治19年の年号をもつものがあり、明治の初めには知られていたようである。この札には「四海艾安部内康樂風雨順序穀豐登」と書かれている。海の安全、地域の無事、天候の安定、作物の豊穰をそれぞれ願う意味であろう。個人の氏神ではあるが、新築時の寄進者には泊里5部落の「船中」の名が多く見られたり、昭和14（1939）年に泊里住民より奉納された鉄剣の絵馬があるなど、地域住民の信仰もあつたようである。戦時中は、林の中で外からほとんど見えないことから、泊里の人々が防空避難で社殿に籠もっていたことがあつたという。

### ⑤⑥ 恵比須さま

漁業者からの信仰の篤い神さまで、当地では碁石のえびす浜に祀られているものが知られている。正ら出たもので、釈迦如来の眷属として仏法を守護する童族の8人の王を指すが、庶民のあいだでは龍神の尊称として広まったのであろう。とくに三陸沿岸では八大龍神を祀る例が多いといわれ、多くは港が見える高台に石碑が立てられている。泊里の近隣でも、小中井の宝龍神社境内に立派な八大龍神碑が祀られている。

ぐ近くに住む、碁石の屋号エビスハマの古座家によつて祀られている。古座家の先祖は、同じ文化13年の碁石岬松植林の際の組頭主立であつた佐五右エ門である。古座家のもと紀州から来た僧の家系と伝えられている。泊里に定着してからは読み書きを教えたり、船主をしたりしていたが、現当主の三代前に碁石のえびす浜に転居した。泊里にいたころの屋号はサゴミヤで、佐五右エ門の名に由来すると考えられる。写真10の中央の石宮二基は、泊里にあつたころの古座家の氏神といわれ、一基は八幡神社付近にあり、もう一基は泊里湾のシヨドコ石のところにあつたのを現在地に遷したものである。

### ⑦ 八大龍神

龍神は水を司る神さまで、農民の間では雨を降らせるものとして、また漁民の間では海上安全と大漁をもたらすものとして、全国的に祀られている。八大龍神（八大竜王）の信仰は、もとは仏教の知識か

泊里の八大龍神は、泊里湾の東側の岬の突端の崖上に立っている（写真11）。『末崎の郷土誌』では建碑は元治元（1864）年とされる。これを祀つたのは三十列の屋号ハンベヤの鎌田家の先祖で、鎌田家ではこれを氏神として、毎年正月2日と盆に参拝している。先般の津波で道が崩れ、現在は近づくのが難しい。地域の漁師には知られているが、定期的に参拝するのはハンベヤのマキの人々に限られる。このマキの人々は、長期の漁に出る前にはこの碑を拜んでから船に乗り、日常的にも船で港に出入りするたびに、八大龍神に見守られていると感じていたという。

ハンベヤの家はもと泊里にあつた。明治29年の津波で一家のうち7人を亡くす被害に遭つたといひ、昭和8年の津波でも家を流されて現在地に移転した。泊里にあつたころからゴザヤの隣家であつたので、先に三十列に上がつていたゴザヤの隣に新しい家を構えたという。

碑の周囲には松が生い茂り、また立派な藤の木があつて、花が咲くと沖からも見えるほど美しかったというが、津波で根が切られ、今はかつてほどの花は見られなくなったという。



10



11

10. 恵比須様(6)の祠  
11. 八大龍神

月2日に、漁業者の代表が「エビス参り」と称して、米や小豆、賽銭、小御幣などを供えて拜む。

えびす浜には恵比須さまが2体祀られている。一体は地図上の⑤で、こちらの方が古いとされる（写真8・9）。三十列の屋号ゴザヤの佐々木家が管理している。佐々木家の先祖は、文化13（1816）年に碁石岬に松の植林をした際に、その山守を務めた権三郎、権四郎父子であり、ゴザヤの屋号は権三郎の名に由来する。恵比須さまもその縁から権三郎が当地に勧請したものと伝えられている。えびす浜の地名も、この恵比須さまが祀られていることからとられた。現在の祠堂は三代目で、初代は大正12（1923）年4月12日の暴風雨で破損し、二代目は昭和56年に火災に遭い、造り直したという。ゴザヤは以前は泊里にあつたが、明治29年の津波で被災して現在の住居に移転した。

もう一体は地図上の⑥で、同じエビス浜の岬食堂前の駐車場脇に祀られている（写真10）。こちらはす



# 一年の行事あれこれ

語り手 武田トシ子さん・大正11年生まれ／武田テル子さん・大正13年生まれ（いずれも西館）

祝い事は1年間12ヶ月のうちにね、昔のようにやったらいっぱいあります。

## 春

正月の2日にはエビス参りってあんだ。これは浜の人たち、船乗りだの船で商売してる人たちが、必ず2日の明け方に碁石の岬の恵比寿様に朝参りに行って、賽銭とか米とか餅を供えてくれた。明治、大正初期の人たちは大事にして、必ず行ったもんだと思うよ。

お正月の8日は山の神様でね、「今日は山入りだ」って、神様にお膳をあげて。8日前は絶対に山に入らして木を伐つちやダメなの。だから小正月に団子をつけるミスキも、「ミスキ団子伐りだ」って、山入りする時、採ってくるんだな。

昔の小正月は、まず賑やかなもんだって。ミスキに米の団子つけて、田を作ってる人たちは「稲穂」って言って藁さ大きな餅をつけて。そして煎餅売りが来てね、必ず煎餅買ってミスキにぶら下げて。掛け軸かけて神様にして、切った餅だの、スルメ干したのだの吊るして。浜は浜なりの祝い事したの。見事なもんだった。昔は各部落で悪魔祓いも小正月にやったんだ。虎舞が一軒ずつ部落を回るの。今はほとんど元日の朝にやるんです。

船持った人たちは船のお祝いごとしたもんだ。船首が船子をみんな呼んで「お膳振る舞え」して、飲んで食べて。だから、なんぼ貧乏でも浜は賑やかだったの。お正月の20日にダンゴおろす時は小豆の

あったの。カッコの上さ台を拵えて、そこから飛び降りて、カッコとカッコの間を泳ぐの。青年団の男の人が中心になってね、女子は泳がねかったな。

八幡様の十五夜は、旧暦の8月。八幡様の境内で相撲やったの。これ、昔から若い人たちの楽しみだね。あの八幡様は西館の大屋（屋号）の氏神様なんです。それで、旧の8月15日に八幡様へ行ってけろやって言われて、よく母とお参りに行ったもんだ。八幡様も、海の神様だからね。

## 秋

旧の9月14、15日は熊野神社のお祭りね。今は4年に一遍だども、昔は1年おきにやったの。それでお祭りが無い年でも、お参りは当たり前にしたの。13日の夜は高田（陸前高田市）あたりから何軒も店が来て、神社の石段の前さ、ずらっとお店出て、盛ったの。お祭らない年でもね、小遣いもらって店さ行くのが楽しみだね。小学校2、3年生の頃のことです。



武田トシ子さん（左）とテル子さん

そして10月すぎれば、12月までは祝い事つうものがいっぱいあったの。その度に神様さお膳あげてね。だから一切の神様用のお膳を揃えたんだ。家々で、

粥煮て、神様にあげて。それをあげてお正月もいたい終わりだね。ドンド焼きはここではしませんね。3月3日は節句。これは一晩泊りで、必ず嫁が実家にやらねの。節句だからって、お札に行くわけ。5月の節句も一晩泊まりで実家行って。

そして3月と9月の16日はね、16饅頭つうの、必ずしたの。米の粉こねて、中にアング入れて、ふかして、小っちゃい饅頭拵えて。一升餅ってあるでしょ、あれさ、その饅頭16コ入れて、神棚さあげて拜んで。お仏様にもあげるんだもの。今も16饅頭だけは作ってたの。津波になってからはしませんが、家が流れねば今年もやってたと思う。

6月15日もやっぱり農神様って言ってね、この日も百姓（農作業）はしないで、神様参りして。農神様はお天王様のことだね。そして麦程で小さい馬作って、ハット（麦粉を練って作った団子）を背負わせて、畑の中に2匹、繋いで置いてくんだ。畑に桑とか柿の木とかあるでしょ、あれに繋ぐんだ。この馬は畑の見回りなんだと。やっぱり「食」ということに感謝する意味だったと思うのね。昔はぜんぶ麦畑で、みな百姓だったからね。

## 夏

7月はほら、七夕あるでしょ。昔は山車が出たのね。馬車にヤグラ組んで、いろんな花飾りして。灯籠も模造紙を4枚か5枚くらい貼り付けて、それに牛若丸とか源氏平家とかいろんな絵を描いて。そして、子どもたちが山車をロープで引く

2膳ずつね。10月1日にはお刈りあげ。必ず前の晩に餅搗いて、神棚に供えて、お正月の真似したもんなんだ。10月20日は初恵比寿って、恵比寿講するの。浜やってなくても、各家で神様にお膳あげて。12月20日にはシメ恵比寿つうのやって、やっぱり神様さお膳を供えて。中恵比寿（11月）はオラ家ではしなかったね。オラ小さい時は、初恵比寿とシメ恵比寿の間にお大師様とかってあったな。11月23日だったかな。お膳を作って、萩で作った箸を添えて。萩の箸はお大師様の杖とかって言って。そして柘さ豆入れて「いい耳聞かせてけろ」って家のお父さんが唱えんだ。嫁ゴ大根って言って、スラツと形のいい大根と又の

ついた大根も1本ずつ、きれいに洗って供えて。ヨメゴ大根は私たちがするようにしてからはやらないがね、母親がしたのは見たね。恵比寿講の時もお大師様の時も、お膳は2膳供えた。でもお大師様は戦後やめたな。恵比寿講はいつまでもやった。

## 冬

旧の11月12日には嫁さん方のお精進講あったんだ。このお精進講つうのはおもしろいの。山の神様拜むのね。12日の夜から2晩くらいでね、これはほんとの嫁さんだけが公民館に集まるの。娘は嵌まないし、もちろんお姑さんも来ない。一年に1回、2日でも3日でもお姑さんから許可ももらって遊ぶんだから、これが何よりの楽しみだったの。だから嫁さん同士でいるんな話もするし、先々の嫁さんから、これからの部落での段取りとか、嫁さんに来たらこうするんだって学んだり。いいこと教えて、

張って、泊里の（漁協の）荷捌き場さ、5部落の子どもたち寄ったんだ。ただ七夕は男の子が主だから、女子は嵌まない（参加しない）。それは見事なもんだ。たよ。でも勉強の妨げになるって学校の先生が言い出して、昭和32、3年頃で終わったの。

8月はお盆でしょ。旧暦だと7月だね。盆棚を家の中に作ってね。今は段々に作るけど、昔は四角に作って、お仏さんを上に置いて笹竹刺して、ほんとの盆棚作ったもんだ。それを家のオカミ（26歳参照）に置くの。迎え火もやったね、個人個人で、庭で。お仏さんのお墓参りの時はダンゴは必ずあげたし、キリキザミ（夏野菜を細かく刻んで蓮の葉に載せたもの）とか果物も持って行って、お盆の14、15日はお寺も盛ったもんだよ。でも衛生上、供え物はやめることになったの。お墓がみんな立派になったれば、何もかにも、あげないということになって、今は水と花だけくらいになったの。親戚親子のお仏参りもね、昔は多くあったんです。大勢来たし、行ったし。盆踊りつうのは、婦人部になってからだから、戦後だね。今の70代の人たちからじゃやないかな。盆踊りがなかった時代には、代わりに8月19日にマンドウロウと言って、灯籠を持って泊里の山本商店まで行列したの。

60年くらい前までは、お盆の頃にカッコ競争っていうのもあったの。昔の青年団の男の人たちがカッコ船で泊里浜から出て、麻腐島をぐるっと一周してくるの。それが競争だったのね。水泳大会も一緒に

徐々に部落の嫁さんになるつう、それがひとつの仕組みだと思ふの。先輩がた、面倒見良かったから。そして、はじめてお嫁さんに来た人たちは「仲間入りする」って言って、お姑さんたちが豆腐を「ひと揚げ」って、10丁か12丁かね、持たせてやるの。この人をよろしくって意味で。その当時はどこの家でも豆腐を作ったもんだからね。山の神は、結局女の人のお産を軽くするってことで、女子の神様だね。（熊野神社にあった）道場の東側の奥の方さ、その山の神様が祀られてあったの。この山の神様は、正月の山入りの時の「大きな山」の神様とは違って、女子の山の神なの。

そのお精進講が終われば、今度は、今みたいにガスも何にもないから、山の木を伐ってお正月の支度をしねばならないから、忙しくなってる。その後、今度は嫁さん方、お裁縫のお暇が出るの。これを洗濯つう言っただね。1週間とか10日ほど、その家によって色々だけでも、まずお暇が出て、嫁先から実家に行って、その間に一生懸命、縫い物するの。嫁さんつうものは、なかなかお姑さんの許可がないと、ねまって（座って）縫い物もできない。だから一年通して10日間のお暇いただと、実家さ飛んでいったもの。そして、上げ膳据え膳で縫わせてもらって、そしてまたお土産持って嫁ぎ先さ送られてきたもんなの。昔はね、そんな時代だったの。昔はいろんなお膳あげて、子ども育てれば育てるなら、いろんな祝い事やったもんだけど、今ではどこでもやんねくなったね。津波になったから余計しないけど、時代の変化つうものはこれなんだな。



古地図を読む

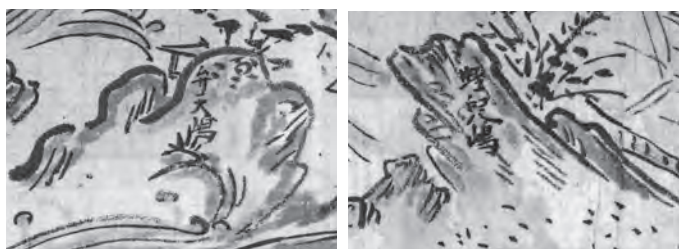
次ページの絵図は、西館の故・村上健男さんが収集していた資料の中にあつたカラーコピーである。原本は熊野神社で保管されていたという。同じ絵図のコピーは碁石の吉田力男さんのものにも残されており、平成24年11月には『東海新報』で報じられて話題になった。

描かれているのは、末崎村の総鎮守である熊野宮(熊野神社・次々地図番号17)を中心に、八幡神社(22)、泊里浜と、浜に沿って形成された泊里の集落である。絵図の右には「気仙郡末崎村惣鎮守熊野宮社地并二八幡社地泊里濱之圖 両社別當法雲院」と書かれている。熊野神社と八幡神社が、ともに法雲院という別當家によって管理されていた時代、その社地を描いた図ということである。泊里浜が詳しく描かれているのは、当時から開けた集落であつたことはもちろんであるが、熊野神社の縁起を説くのに欠くことのできない場所だからだと考えられる。

浜のちょうど中央あたりには鳥居が描かれている(13)。そして鳥居から集落を横切り、川沿いの道を通つて熊野神社の境内までが赤線で縁取られている。この道は熊野神社の参道であり、縁取りは熊野神社の社地であることを表しているのだろう。八幡神社の境内も同じく縁取りされていることから、これも熊野神社の社地であつたとみられる。さらに浜の鳥居の先には大きな鳥があり、「権現出現之地也

んによると、先祖からこの石は神さまが休まれた石だと聞いており、祭礼ではこの石に神輿を乗せて休ませていたという。

境内に目を移すと、そこにも「コシカケ松」がある(19)。そして熊野宮の東側には牛頭天王(18)、西側には弁財天(9)、大神宮(8)といった末社が描かれている。それぞれ立派な社屋が描かれているが、現在はどれも残っていないのは少々意外である。一方海に目を転じると、そこにも興味を引かれる点が様々ある。とくに浜近くの岸辺には、たくさん岬や島、石などが書き込まれ、よくみるとその中に名前が書かれているものが少なくない。泊里湾の西側、館ヶ崎のあたりは小山として描かれ、「古館」と読める(1)。



弁天嶋と蛭児島

その先には「明神崎」とも書かれている(2)。現在も聞くことができる地名である。その館ヶ崎の湾内側には「蛭児嶋」と書かれた島がある(3)。蛭児は記紀神話にイザナキ・イザナミの子として登場し、一般には恵比須さまとして知られる神の名前である。この島の記憶は今も聞くことができる(54参照)。

対する湾の東側を見ると、やはり岬の突端が小

クサレ嶋と云来由アリ」と書かれている(15)。言うまでもなく、熊野神社に祀られる神輿と宝物が最初に漂着したという伝承のある麻腐島である。

この浜の鳥居から境内までの参道は、泊里漁港の船場が整備され、御旅所がそちらに設けられるようになる以前の昭和20年代まで、熊野神社祭礼の渡御行列がたどつたのとほとんど同じ道である。祭礼の渡御行列が、麻腐島に着いた神輿が浜から上がつて神社に祀られるまでの軌跡を再現しているということが、これによってあらためてよくわかる。

ちなみに浜の鳥居のすぐ隣には、四角く柱を組んだようなものが建っている(14)。おそらく古くから祭礼には渡御行列があつただろうから、その御旅所とも見えるが、昭和2(1927)年刊の『末崎村誌』の泊里湾の解説に「湾内に護摩が淵と称する所有り往昔熊野神社の護摩を炊きたる所なり」という興味深い記述がある。熊野神社は修験の神社で、護摩祈禱は修験道にとつて重要な儀礼である。屋外で護摩を焚く場合は、四方に柱を建て、注連を張つて境界するのが一般的であることからすると、これがその護摩が淵を表しているのではないかという想像も湧いてくる。

境内の入り口の大鳥居(10)は、現在の石の鳥居とは異なつており、朱塗りで鳥居本体の柱の前後に小さな柱がついた形状である。この鳥居は、両部鳥居あるいは権現鳥居といつて、神仏習合の神社、とりわけ密教や修験道の影響の強い神社に見られる様式である。やはり修験の神社である熊野神社にふさわしい。

高い丘として描かれ、そこには「東館 アタコ山ト云傳アリ」と書かれているようである(28)。「西館」が地名として残るのに対し、「東館」は忘れられてしまったのだろうか。そしてこれを挟むように、湾内側に「弁天嶋」が(30)、湾外側に「大黒嶋」(29)が描かれている。18世紀の地誌『封内風土記』に、海中の島に弁財天堂があつたとされるのが、この弁天嶋かと思われる。館ヶ崎に対してこちらの岬を「弁天嶋」と呼んだことを記憶している人が、今もわずかにいるようである。それにしても、恵比須、大黒、弁天の島があるとすると、他の福神の島もなかったものかと探したくなる。これらの島のほとんどが、戦後の港湾整備によつて姿を消してしまった。

さて何よりも気になるのは、この絵図に描かれた泊里浜はいつの時代かということであろう。まずそのヒントになるのは、右の「両社別當法雲院」という文字である。『末崎の郷土誌』には、歴代の熊野神社の宮司の名前が挙げられている。この中で「法雲院」の院号をもつのは、第18代の有教と、第34代の宥源である。34代の宥源は、熊野神社が享保18(1733)年に再建された際の棟札の一枚に、別當としてその名が記されているという(渡辺兼雄『郷土誌探訪 気仙つれづれ』)。この法雲院宥源は、一度は還俗した別當家を継いで神社の遷宮を実現した、熊野神社中興の祖とも言ふべき人物である。ただし法雲院を号したのは宥源だけでなく、以後の別當は、少なくとも明治の神仏分離まで法雲院の院号を継いだと思われる。例えば、文化13(1816)年の松の植林を記念して碁石岬に建てられている顕彰

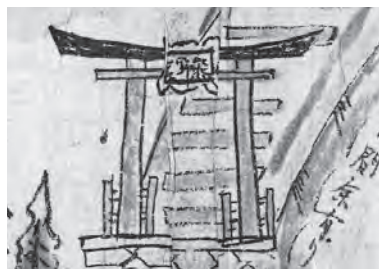
その大鳥居の前と、さらに境内の東西の両脇には、大きな樅の木が描かれている(6・11・20)。碁石地区の人であれば知らぬ人のない、三面樅が健在だった頃の姿であろう。その西側には別當の屋敷(屋号・上坊)も描かれている(5)。

興味深いのは、その南面の樅のすぐ近くに、「三社コシカケ石」という大きな石が三つ描かれていることである(12)。三社とは熊野の本宮大社・速玉大社・那智大社のことを指すのだが、そもそも中森熊野神社は「熊野三社」と呼ばれており、この三社をまとめて勧請しているのである。今も拝殿にかかった扁額には「熊野三社」と書かれているし、境内には「熊野三社碑」もある。

泊里の屋号シタボの村上勝弘さんは、この三社コシカケ石が近年までシタボの家の脇にあつたことを覚えていた。1メートルほどの直径の丸っこい石が3つあり、熊野神社祭礼のときには注連縄を張つていたという。平成4年に神社参道を拡張したときに石は撤去されたが、その少なくとも一つは、神社の下の広場の隅に移されて現存する。ワンボウの志田絹子さ



鳥居前の三社コシカケ石と樅



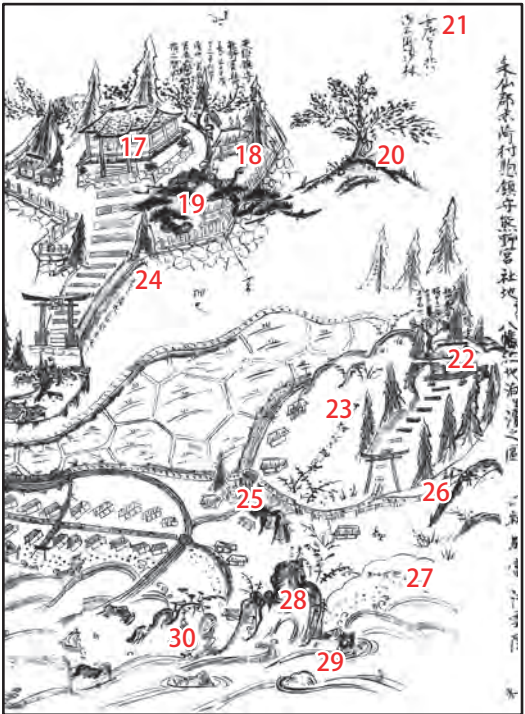
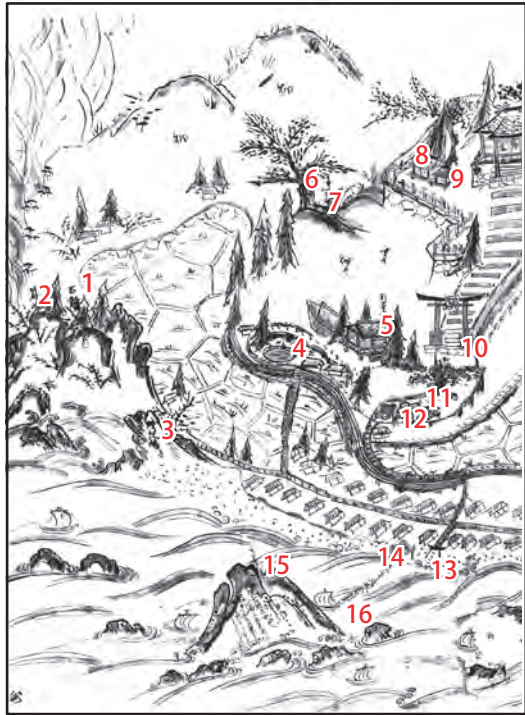
熊野神社の大鳥居

碑には法雲院の名が刻まれている。『末崎村誌』によれば、門之浜の新山神社の棟札に「文化十一年甲戌歳 別當兼帯法雲院榮重」と記されており(文化11年=1814年、榮重は熊野神社38代別當)、熊野神社境内裏の経塚の碑には「安政丙辰八月 法雲院四十世現住 祐慶識」と刻まれている(安政丙辰は1856年)という。もう一つのヒントは、前に述べた鳥居である。絵図の鳥居が現在の石鳥居とは異なることがわかるが、では、現在の鳥居はいつ建てられたものか。鳥居に年号が刻まれていることなどは確認できなかつたが、『末崎村誌』には、安政7(1860)年に石鳥居ほか献納されたと書かれている。これが現在の鳥居だとすると、絵図は少なくともその前に描かれたと考えると間違いないだろう。

社殿は享保18年3月と、文化6(1809)年9月の2度、再建の記録がある。絵図に描かれた拝殿は、屋根が葺き替えられているのを除いては、現在のものとほぼ同一の建築様式のように見える。これが正しいとすると、絵図は文化6年以降で安政7年までに描かれたと考えられるが、これは筆者の推測である。正確な年代の特定は難しい。いずれにせよこの絵図は、泊里の浜がこの地域の中心であつた時代の様子をいまに伝えてくれる、たいへん貴重な史料である。この後、明治・昭和・平成の3度の天津波や、戦後の開発によつて徐々に生活圏は周辺に広がっていった。いまの泊里5部落の礎がここにあつたということを、この絵図とともに後世に伝えてほしいものである。



気仙郡末崎村惣鎮守熊野宮社地  
并ニ 八幡社地 泊里浜之図  
ならびに  
両社別当法雲院



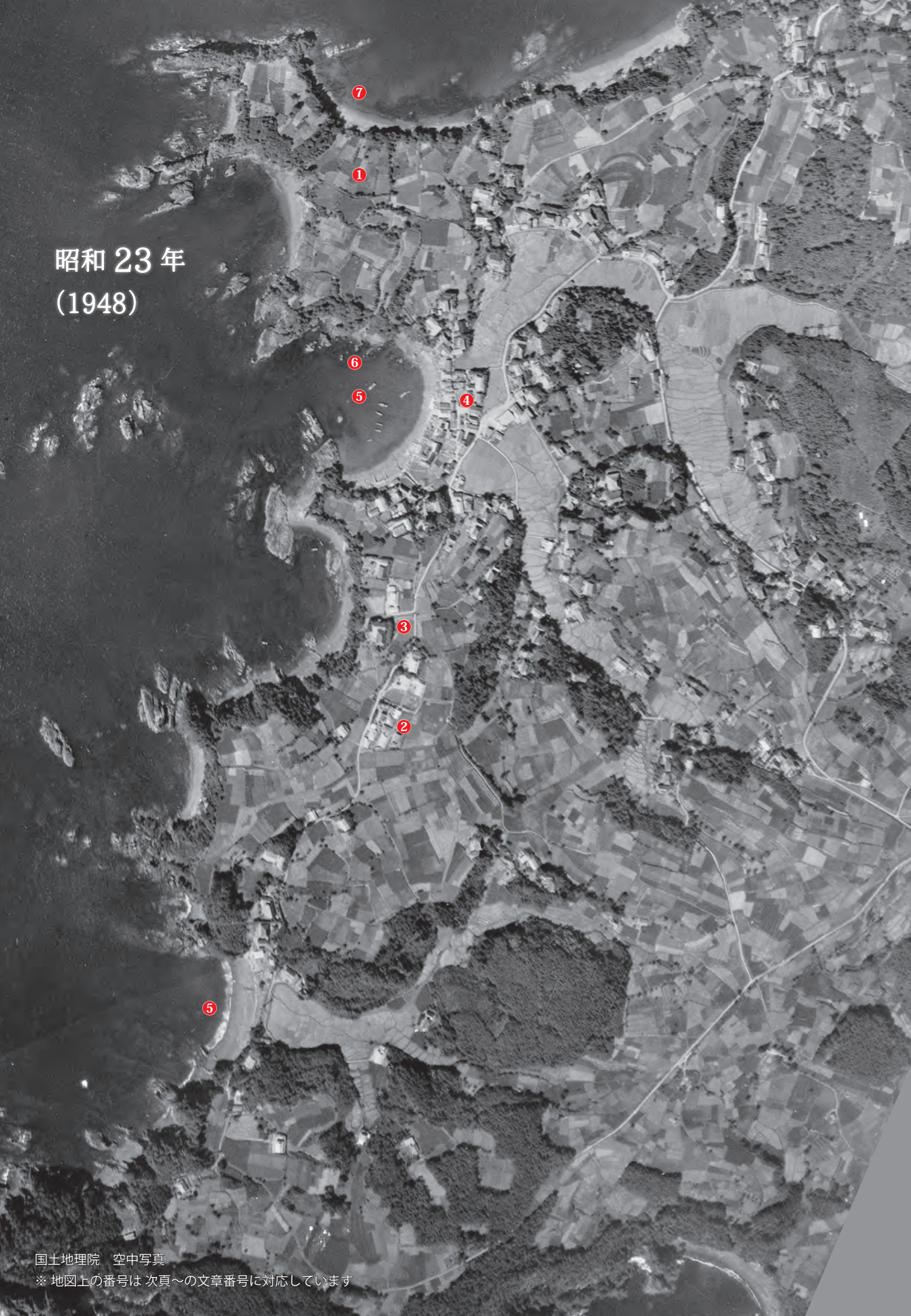
- 1. 古館 2. 明神崎 3. 蛭児嶋 4. 今石井 5. 別当居家 6. 椿 7. 弁天社 8. 大神宮 9. 弁才天
- 10. (「熊野宮」の鳥居) 11. 椿 12. 三社コシカケ石 13. (泊里浜の鳥居) 14. (泊里浜の祭壇?)
- 15. ヲクサレ嶋 権現出現之地也 ヲクサレ嶋と云来由アリ 此嶋ニ而 三社之行楽アリ 時 古之姥 アサヲクサラシ  
タモウニヨリ ヲクサレト■■■ 16. 是より嶋迄 五百間余アリ
- 17. 熊野宮 邑惣鎮守 熊野宮社地 長十四間 横十二間 村竿 除地 宮辰巳向也 宮長五間 横二間半

- 18. 牛頭天王 19. コシカケ松 20. 椿 21. 此所より北ハ 御公儀御林
- 22. 八幡宮 社地 長二十間 横十三間 宮二尺 ■■ 四■ 未申向也
- 23. 此間 畑ハねき畑と云伝 24. 是より濱迄 三百間余有リ
- 25. ミタラセ井 26. 碁石濱道 27. 袖口■■磯濱
- 28. 東館 アタコ山ト云伝アリ 29. 大黒嶋 30. 弁天嶋

※判読困難なものは ■ で示した  
また旧字体は新字体に改めた



昭和 23 年  
(1948)



昭和 52 年  
(1977)



# 移りかわる風景

碁石を空からとらえた航空写真。左は戦後すぐの昭和23年、右は高度経済成長期にあつた昭和52年のもの。現在とは風景が大きく変化しているのがわかります。



- 昭和9年(1934)、「住宅」の建設予定地。「1360坪の敷地を造成し、19戸を収容す」とある(『三陸津浪に因る被害町村の復興計画報告書』S9年より転載)
- 碁石の椿並木(吉田力男氏提供)
- 農協泊里支所。左端は農協職員だった武田トシ子さん。右端は細川レンさん。レンさんは終戦後に満州から引き揚げ、農協の一角で床屋を開業していた。メガネの男性は泊里診療所の台湾人医師。「タイワン先生」と呼ばれ親しまれた。子どもは泊里の村上忠一さん(武田隆氏提供)



4



5



6

## 暮

らしの変化は、風景の変遷と共にあります。例えば、昭和23年の航空写真では高台を中心に一面に畑が拓かれています。時代は戦後の食糧難、特に精神的に畑が作られました。主な産物は麦。幼い子ども達も麦踏みや麦刈りなどの手伝いをさせられ、繁忙期には小学校も休校になるほどでした。一方、昭和52年になると畑はだいぶ減り、耕地だった場所は山に戻って木々が繁茂している様子がわかります。宅地も増えました。泊里湾では、湾内に大小様々にあつた岩や島が取り払われ、護岸が進み、防波堤がほとんど海にせり出しています。

昭和30年代初頭にワカメの養殖技術が確立されて安定した現金収入が入るようになり、住民の暮らしが目に見えて変わりはじめたのが昭和40年代後半頃から。あれほど盛んだった麦作も、多くの家では昭和40年代まででやめました。また同じ頃から徐々にガスが普及し、山でゴンド(松葉)をかき集めたり、薪を拾ったりすることもなくなりしました。

こうして陸(山や畑)から退き、海へとせり出していく傾向は、日本の農山漁村で広く見られる暮らしと風景の変化です。東日本大震災後の復興も、こうした移りかわりの先にあります。今後、碁石の風景はどのように変わっていくのでしょうか。

1

## 丘の風景

### ① 高台の耕地

かつては盛んだった畑作は主に女性の仕事。高台には一面に畑が拓かれていた。昭和2年の記録に「耕作物の主なるものは麦類にして、米、大豆、蕎麦これに次ぐ」とあるように、特に多く作られたのは麦で、この一帯は気仙地域でも有数の麦の産地として知られていた。当然、日々の食事も麦が中心で、主食は押し麦に米を混ぜたご飯。米より麦の割合の方が多かった。畑では麦に加え、大豆をは

じめとする自家用の野菜を作ったり、現金収入として煙草栽培を行った家もあった。畑の脇の斜面や家の境にはお茶も植えられた。気仙地方はお茶栽培の北限地(太平洋側)で、ヤブキタという寒さに強い品種が自家用に作られた。かつては製茶まで自宅で行っていたが、戦後、小友(陸前高田市)や大船渡の農協にお茶工場ができてからはそこで製茶してもらうようになったという。泊里に「茶畑」(10戸屋番号76)という屋号の家もあったように、泊里では隣祥寺や吉十郎屋(屋番号78)など、近年までお茶を作っていた家もあった。

こうした畑地ではワカメの天日干しなども行った

### ② ジュウタク―昭和の高台移転計画

もので、そうした慣習は昭和40年代にワカメの塩蔵加工法が開発されるまで続いた。重いワカメを高台の畑まで担いであがるのが一苦労だったという。

麦や、換金作物である煙草の栽培は昭和40年代まで行われていたが、昭和32年にワカメの養殖技術が確立して以降、養殖業が次第に盛んとなり、海で安定した収入が得られるようになってくると作られなくなっていく。畑地も次第に宅地になったり、山に戻っていく、風景は大きく変化していった。

昭和8年に津波が襲った後、大きな被害を受けた泊里では高台移転の必要が叫ばれ、数軒の地域住民が土地を提供して、碁石地域に新しく宅地が造成された。それが現在「住宅」と呼ばれ、家が立ち並ぶ一画。写真4は昭和9年3月、造成前の「住宅」予定地の一帯を捉えた写真。一面の畑が広がっているのがわかる。



1



2

写真1・2は昭和34、5年頃、西館の屋号丸田(11戸屋番号4)の付近で撮影した麦の脱穀作業の様子。脱穀を終えた麦から穂や茎などの不純物を取り除いた



3

め「箕ぶき」をする。麦ワラは納屋の2階などで保管し、屋根を葺く材やサツマイモの苗床として利用するなど、貴重な資源となった。写真3は昭和21年(1946)、末崎町小細浦(こぼそうら)の屋号カカシミヤという家で農協職員の懇親会が行われた際に撮影されたもの。後ろの畑は麦のように見えるが、不明(いずれも武田隆氏提供)



### ③ 椿並木

写真5は碁石集落の屋号滝の上(吉田力男氏宅)の上にあつた椿並木。昭和30年代、この椿並木を挟むように道路が2車線に拡張されたが、この写真はその前に撮られたもの。椿は平成に入ってから市博前などに移植され、椿並木の風景はなくなった。

### ④ 農協泊里支所

農業協同組合の泊里支所(写真6)は昭和12年の建築。当時、事務所と共に売店も兼ねており、ガラス窓に「雑貨・砂糖・履物・石油・漁具・木炭・醬油・米穀」とあるように、様々なものが売られるよろず屋だった。地域の中心的な公共施設でもあり、昭和27年にはこの支所内に泊里診療所が開設された。軒下に「10番」とあるのは、当時の電話番号。碁石5地区で電話が最初に入ったのはこの泊里で、昭和15年の記録によれば、当時1台が設置されている。また当時、食料品を売る店として、この泊里支所以外に泊里に4軒、西館1軒、碁石と三十刈に2軒の商店があつたとも記録されている。

## 2

### 海の風景

### ⑤ 漁港の整備

泊里湾の漁港や防潮堤が本格的に整備されたのは昭和25年のこと。その後、数度の拡張工事が行なわ

### ⑥ 蛭児島

れた(写真7)。最初の本格的な整備が行われる以前、昭和23年の泊里湾にはまだ防潮堤や護岸がなく、湾内にはたくさん的小島や岩礁がある。このうち、湾の中央やや東寄りにある小島はマルコ島と呼ばれた島。その南、東側の湾口から突き出た岩は48ヶの古地図にも描かれた弁天岩。この島の近くにはヨドッコ(淀み)があり、滞った水が温かくなっていたので、「銭湯」などと呼んで入って遊んだものという。こうした島々は、昭和52年の写真ではきれいに取り払われ、代わりに船着場や防波堤が整備されている。浜沿いには宅地や作業小屋が増えた。昭和23〜52年までの30年間は、ちょうど養殖業が盛んになった時代。海の生産能力の向上に反比例するように、湾の西にある碁ヶ崎の畑地はほぼ消滅している。その後、平成13年には、さらに外洋部に施設が造られ、震災直前の写真では、湾口防波堤が海に大きくくせり出している。作業場も大幅に広くなった。この拡張工事により、それまで泊里浜から見えていた麻腐島が見えなくなってしまうという。一方、写真8は昭和30年初頭の碁石浜。碁石状の黒い石は、当時から多くの観光客を魅了していた。奥にとまっているのはすべて木造のカッコ船で、FRP(繊維強化樹脂)船は一艘もない。この時代にはまだ木造カッコが主力であつたことがわかる。

泊里港の整備に伴って取り払われた湾内の岩のひとつが、49ヶの古地図にも描かれている蛭児島だ。泊里湾の西部にあつた小岩で、干潮時は陸続きだった

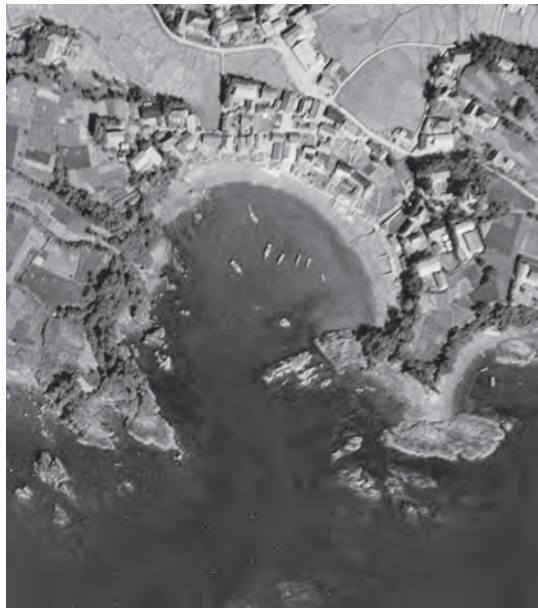
たが、満潮時には島になったという(写真9)。この島よりも集落側(北側)の浜を熊野浜と呼び、かつては砂利の白浜だったと記憶されているが、蛭児島も熊野浜も護岸整備により残っていない。蛭児島の近くではガゼ(ウニ)がよく採れたという。

### ⑦ 白浜の砂利運び

かつては学校や役場を造成したり改築するのに浜の砂が用いられた。特に重宝されたのは碁ヶ崎西岸の白浜の砂利。これを運ぶのは小学校の生徒たちも一役買った。西館の武田トシ子さん(大正11年生まれ)、照子さん(大正13年生まれ)によれば、当時4年生以上の生徒が「体操の時間」に白浜の砂利を風呂敷に包み、小学校まで運んだという。浜から小学校までは子どもで片道30分。それを2往復した。白浜のほかにも、小河原(末崎町)の浜からは玉石を運び、小学校の石垣を造つたという。昭和23年に中学校を建てる際も同じように子どもたちが活躍したというから、砂運びを記憶している人は今でも多い。



9. 中組(泊里)の婦人会と子どもたち。戦地へ送る慰問袋へ入れるために、蛭児島で記念撮影(大和田太一氏提供)



7. 泊里漁港の変遷。左から昭和23(1948)年、52年(1977)、東日本大震災前(2010頃)、震災後(2011)



8. 昭和30年初頭の碁石浜で(武田貞一氏提供)



### お話を聞かせてくださった方々(50音順)

〔西館〕及川宗夫さん(昭25生)・大和田東江さん・恵美子さん夫婦(昭16・21生)・金野イワさん(昭9生)・志田絹子さん(昭和9年生)・鈴木ミエ子(昭19生)・武田隆さん(昭23生)・武田照子さん(大13生)・武田トシ子さん(大11生)・村上征一さん(昭19生)

〔泊里〕大和田太一さん(大8生)・鎌田吉夫さん(昭14生)・熊谷克夫さん(昭17生)・熊谷芳弘さん・美代子さん夫婦(昭21・27生)・浜守正一さん・トモ子さん夫婦(昭7・10生)・村上勝弘さん・富士子さん夫婦(昭27・33生)

〔碁石〕大和田長一さん(昭14生)・大和田哲夫さん(昭13生)・古座孝也さん(昭19生)・吉田力男さん(昭18生)

〔三十刈〕鎌田港一さん(昭11生)・佐々木賢治さん(昭15生)・志田保さん(昭29生)・志田寅之進さん(昭14生)・鈴木哲雄さん(昭17生)・村上勝さん(昭12生) ほか

〔山根〕鈴木祥正さん・ツネ子さん夫婦(昭12・15生) ほか碁石五地区のみなさま

### 刊行によせて

私たちがはじめて碁石を訪ねたのは、東日本大震災から1年3ヶ月後、平成24年の初夏のことでした。震災による津波で甚大な被害を受けた碁石では、住民の間で高台移転計画が話し合われていました。

私たちが普段、専門にしている民俗文化(財)は、その地域で時間をかけて育まれ、人から人へ、少しずつ形を変えながら引き継がれてきたものです。人々の日々の暮らしと共にあり、ほとんど無意識に営まれているこうした文化は、震災後に暮らしや地域コミュニティの在り方が変化していく中で、容易に忘れられていくのではないかと、それを少しでも記憶に留めておくためのお手伝いができないか。そのような思いからこのプロジェクトは始まり、本書が編まれました。地域の民俗文化を記録するということは、単に過去を記録するというだけではありません。自分たちが背負ってきた歴史や文化がどのようなものだったのかを知ることは、復興の過程で新しい地域像が模索されるときに、あるいは地域の方々アイデンティティを再確認するために、少なくとも意味を持つのではないのでしょうか。ここで取上げることのできた事柄はほんの断片にすぎませんが、本書が、地域の文化とその意味について考える小さなきっかけになればと願っています。

(東京文化財研究所 無形文化遺産部)

### 写真提供(50音順)

大和田 太一さん(泊里)

熊谷 芳弘さん(泊里)

鈴木 哲雄さん(三十刈)

武田 隆さん(西館)

武田 貞一さん(西館)

吉田 力男さん(碁石)

\* \*

川島秀一氏(東北大学)

大船渡市立博物館

東北歴史博物館

### 調査・執筆(50音順)

今石 みぎわ(東京文化財研究所)

「泊里五部落」二年の行事あれこれ「移りかわる風景」

鈴木 清(民俗建築研究所)

「住まうー気仙大工のいる暮らし」

俵木 悟(成城大学)

「いのりー祭り行事と信仰」

森本 孝(漁村研究家)

「海に生きる」

### 協力

独立行政法人防災科学技術研究所

竹原万雄(東北芸術工科大学)

### 参考資料等

『大船渡市史』第4・5巻 大船渡市 昭和55・57年

『管内実態調査』大船渡警察署 昭和30年

『気仙郡末崎村郷土教育資料』昭和15年

(岩手県立図書館所蔵/マイクフィルム)

『熊野信仰と東北―名宝でたどる祈りの歴史―』

東北歴史博物館 平成18年

『三陸津浪に因る被害町村の復興計画報告書』

内務大臣官房都市計画課 昭和9年

『写真にみる気仙―明治・大正・昭和初期―』

大船渡市立博物館 平成3年

『津波をみた男―100年後へのメッセージ―』

大船渡市立博物館 平成9年

『東北地方の仮面―芸能と祈りのこころ―』

東北歴史博物館 平成12年

『西館の祭りは世代を越えて』西館公民館 平成25年

『末崎村誌』末崎村出版 昭和2年

『末崎村勢要覧』岩手県気仙郡 昭和10年

『末崎の郷土誌』末崎愛林公益会 平成17年

\* \*

田邊希文(撰)『封内風土記』巻之二十一 明治26年12月発行 仙台叢書出版協会

村上道治郎編『熊野神社の来歴と文化財』大船渡市立博物館 昭和47年

山奈宗真『岩手県沿岸大海嘯取調書』『岩手県沿岸大海嘯部落見取絵図』(津波デジタルライブラリー所蔵/ <http://tsunami-dl.jp/>)

渡辺兼雄『郷土史探訪 気仙つれづれ』

東海新報社 平成24年



赤土倉の巾着岩

## ごいし民俗誌

岩手県大船渡市末崎町碁石五地区

発行日 平成26年3月31日発行

編集・発行 独立行政法人国立文化財機構  
東京文化財研究所無形文化遺産部  
〒110-8713 東京都台東区上野公園13-43

TEL 03-3823-4927

印刷 (有)大船渡印刷